

ロシア人は何故乞食に金銭的援助をするのか？

西村 爽香

## 目次

はじめに

1. ロシアにおける乞食問題
  1. 1 時代別にみるロシアの乞食
  1. 2 国家に弾圧される乞食 ―物乞いは犯罪か?―
  1. 3 乞食が象徴するものとは ―それでも施しをするロシア人―
  
2. ロシア人と貧困
  2. 1 時代別にみる貧困と社会保障
    2. 1. 1 帝政末期の貧困と社会保障
    2. 1. 2 ソ連期の貧困と社会保障
    2. 1. 3 ソ連崩壊後の貧困と社会保障
    2. 1. 4 2000年以降の貧困と社会保障
  2. 2 ロシアにおける貧困の特徴
    2. 2. 1 恐怖政治と一斉貧困 ―ソ連の歴史と貧困―
    2. 2. 2 一時的貧困
  2. 3 ロシア人にとって貧困とは
  
3. 正教信仰と相互扶助の伝統
  3. 1 ロシア正教会と施しの精神
  3. 2 農村共同体における相互扶助の伝統
  3. 3 伝統から精神へ ―受け継がれる相互扶助―
    3. 3. 1 受け継がれる正教信仰
    3. 3. 2 受け継がれる共同体精神
  
4. ロシア人は何故乞食に金銭的援助をするのか?
  4. 1 施しの動機として考えられる3つの要因
  4. 2 “積極的な助け合い”としての施し

おわりに

参考・引用文献

図表・巻末資料

## はじめに

私は2017年度の1年間、ロシアの首都であるモスクワで過ごす機会があった。モスクワの街は東京の中心部を連想させるほどの大都会であった。しかし一方で道や電車、教会付近など至る所に物乞いをしている人たちが見受けられ、何より彼らにお金を与える人々の多さに驚いた。日本では、ホームレスの方を見かけることはあっても物乞いをしている人を見かけることはめったにない。だからもちろん日本人が施しをする姿を目撃する機会もほとんどなかったため、これは私にとってとても衝撃的な光景だったのである。

そこで私は、ロシアには何故「乞食」<sup>1</sup>が多いのか、そして何より何故ロシアには乞食にお金をあげる人が多いのかという疑問を持ち、後者の疑問をメインテーマとした。後者をメインにした理由は、施しをする人々がいるから物乞いをする人がいるというロジックがある程度当てはまると判断したためである。又、モスクワでの生活を通じて、ロシアには助け合いが溢れていると感じたことも援助する側に注目した理由の1つだ。

助け合いと上記したように、私はモスクワに乞食がいることはともかく、ロシア人の施し行為について負の印象は抱いていない。例えば、ロシアのバスや電車では席の譲り合いが当然のように行われるため優先席がなくても問題はなかったし、私が財布を紛失したり緊急に治療費が必要になった時も、知人たちはいつだって金銭的援助を申し出てくれた。レジでしばしば起こる釣り銭切れの際にも、お金が丁度なければ後ろに並ぶ見ず知らずの人が平気で支払ってくれた。ロシアはそんな助け合いの溢れる国だったのである。

本稿の目的は、他人の代表格である乞食を軸にロシアにある助け合いの習慣を明らかにし、積極的に助け合いが行われる理由を探ることである。まず第1章ではロシアにおける乞食の問題についてまとめ、ロシア人にとって乞食は何を象徴する存在なのかを考察する。第2章ではロシアの貧困問題とその特徴についてまとめ、ロシア人の貧困への向き合い方を考察する。続く第3章では宗教面と相互扶助の伝統から助け合いの習慣ができた背景について探り、第4章で結論を述べる。なお、本論文の執筆にあたり独自にアンケートを行った。詳細は参考資料として巻末に掲載する。

## 1. ロシアにおける乞食問題

### 1. 1 時代別にみるロシアの乞食

---

<sup>1</sup>本稿では物乞いをする人々をロシア語の *попрошайка* (乞う人) に最も近いと考えられる乞食という言葉で統一するが、語句に差別的な意味は含まない。

乞食はいつ頃からロシアにいるのだろうか。明言はできないが、バーニス（1974）は、イヴァン雷帝が援助もされないままに国外追放されている乞食の現状を嘆いていたという報告を紹介している。従って、16世紀には既に一定数の乞食がいたと言えるだろう。

帝政ロシア時代の乞食の具体的な数については内務省が1877年の時点で30万人と報告しているが、1900年に『乞食稼業—その原因、形態、生活概要』と題した著作を刊行したレヴェンstim(A. Левенstim)は、その数値を全くもって過少評価であると断言している。そのうえで乞食が驚く程増加しているのは政府が貧民救済を怠っているだけでなく、流刑や首都からの追放など人為的に乞食を生み出しかねない諸制度の運用を続けているからだと言及した。他にも彼は乞食稼業が栄えた理由として、当時の農民心理は物乞い行為に対するためらいがなかったと指摘している。2章で詳しく述べるが、ロシアでは生活費用として出稼ぎ・副業収入に依存している傾向がある。帝政ロシアの農民たちは縫製や大工による出稼ぎをやるほか、それらと並行しつつちょっとした稼ぎとして物乞いを選択していたというのだ。つまり、彼らは乞食稼業に対して他の副業と同等の地位を与えており、乞食は他人様から慈悲を求める専門家として捉えられていた。（高田2007:347）

社会主義国であったソ連時代に関しては、貧者はおらず物乞いなどする必要のなかったという意見もあるが、それは恐らく政府の対外宣伝文句であろう。確かに1917年のロシア革命で乞食を援助するシステムは破壊され、物乞い行為は社会主義の評判に害を与える存在として犯罪化された。しかし実際、1920年代半ばには200万人近くの乞食やホームレスがいたと、元国営通信社は報じている。<sup>2</sup> 又、正確なデータは残されていないそうだが、1960年代までソ連での物乞い活動は栄えており、しばしば食料にありつく唯一の方法だったという報告もある。乞食は特にモスクワで多かったようで、1935年のスターリン政権期に彼が信頼を置く盟友は「我々の社会主義国の首都モスクワで毎年乞食が増えているのが我慢ならない」という趣旨の手紙をスターリンに送ったそうだ。その後国の徹底した排除策によって大都市部の乞食は減っていったと言われている。<sup>3</sup>

では現代社会の乞食はどうであろうか。ロシア連邦のプーチン内閣（統一ロシア党）で大統領補佐官兼会計検査員の議長を務める経済学者のタチャーナ・ゴリコヴァは、乞食を含むロシアの貧困線以下の人々の数が2017年の時点で2000万人を超えていると報告している。その数は更に増える見込まれており、主な原因は経済復興の遅さにあると専門家は断言している。<sup>4</sup> 又、内務省は対象を乞食だけに絞った報告をしており、それによるとモスクワにいる乞食の数は2016年の時点で約2000人であり、そのうちロシア人はおおよ

---

<sup>2</sup> «История борьбы с нищенством: отечественный и зарубежный опыт», РИА НОВОСТИ, 2017, <https://ria.ru/amp/spravka/20071124/89388885.html> (最終閲覧 2018/12/16)

<sup>3</sup> Игорь Киян «Сытый голодному не верит - Сколько нищих было в СССР -», Наша версия, 2017, <https://versia.ru/amp/skolko-nishhix-bylo-v-sssr> (最終閲覧 2018/12/16)

<sup>4</sup> «Количество нищих в России будет увеличиваться с каждым годом», Московский комсомолец, 2017, <https://www.mk.ru/economics/2017/12/22/kolichestvo-nishhikh-v-rossii-budet-velichivatsya-s-kazhdym-godom.html> (最終閲覧 2018/12/16)

そ 50%、残りの半分は主にモスクワに出稼ぎに来ている近隣諸国の人々だそうだ。<sup>5</sup>しかしこの内務省の報告は少なく見積もり過ぎているように思える。対象を乞食・そしてモスクワに絞ったことを考慮してもゴリコヴァの報告数とかけ離れているし、何より執筆者自身がモスクワで体感した乞食の規模と一致しない。加えて、モスクワの地下鉄で差し押さえた乞食の数は 2014 年で 2258 人、2015 年で 980 人だとモスクワ警察は報告しており<sup>6</sup>、数こそ減っているものの逮捕を逃れられている乞食や地下鉄以外での物乞い行為を考慮すれば 2000 人は軽く上回るのではないだろうか。一方、地下鉄にいる乞食数の減少に関してはロシアの老舗日刊紙であるイズベスチヤも報じているためある程度信憑性のあるものと思われる。モスクワ警察内務局次官であるオレグ・ガガーリンは、「恐らくは経済状況のおかげで乞食の数は減っているが、それだけではなく、警察が地下鉄にいる乞食と戦う姿勢を徹底的に示していることも要因ではないか」と述べている。<sup>7</sup>

次に現代ロシアにおける物乞いの繁栄原因についてだが、これに関しては注意深く分析する必要がある。帝政ロシア、ソ連時代を振り返ると、乞食稼業の繁栄には国民の低所得・貧困が密接に絡んでいたと言い切れる。現代ロシアの場合も金銭面の問題が関係してくるのは間違いないと思われるのだが、多くのメディアは乞食が出現する最大の原因として詐欺の増加やマフィアが奴隷化している乞食の存在を挙げている。執筆者がロシア人に対して行ったアンケート<sup>8</sup>でも、Q1「モスクワには何故乞食や、物乞いをするホームレス<sup>9</sup>が多いと思いますか？」に対して 51 人中 16 人が「ビジネス・詐欺として」と回答している。これは「仕事に就くのが難しい・低賃金な仕事しかない」と並んで最も指摘数の多い回答の 1 つであり、金銭問題に関する指摘の総数と比較すると少数ではあるものの無視できる数ではない。そこで、次節では乞食の犯罪性について述べていく。ちなみに他の主な回答としては「貧しい人が多いから (11 人)」、「大都市だから (10 人)」、「国の対策不足<年金・失業手当の不足など> (8 人)」、「突然のリスク・不幸<失業や詐欺の被害> (8 人)」、「労働意欲の欠如 (8 人)」、「他都市・他国からの出稼ぎやその失敗 (6 人)」、「施しをする人が多いから (6 人)」、「アルコール依存症 (5 人)」と続いた。<sup>10</sup>

## 1. 2 国家に弾圧される乞食 ー物乞いは犯罪か? -

<sup>5</sup> «Арест за протянутую руку. Кого и где наказывать за попрошайничество?- 04.02.2016», Закония, 2016, <https://www.zakonia.ru/theme/arest-za-protjanutuju-rukukogo-i-gde-nakazyvat-za-poproshajnichestvo-04-02-2016> (最終閲覧 2018/12/16)

<sup>6</sup> «Количество попрошаек в московском», Рублев, 2015, <http://rublev.com/novosti/541> (最終閲覧 2018/12/16)

<sup>7</sup> 同上

<sup>8</sup> 執筆の参考として記述式のアンケートを実施した。対象者はモスクワに居住経験のある、18~69 歳のロシア人 51 人で、なるべく世代に偏りが出ないように収集した。以下、アンケートとはこのアンケートのことを指すことにする。詳細は巻末 (p.i) に収録する。

<sup>9</sup> 物乞いをせずに暮らすホームレスの存在や、住まいを持つ乞食の存在を考慮して「物乞いをするホームレス」とした。

<sup>10</sup> アンケート項目 (p.ii)

この節では、「物乞いは犯罪行為なのか？」という切り口からロシアの乞食問題について理解を深めようと思う。なお、説明するにあたり乞食の分類化を試みた（表1<sup>11</sup>）。はじめに言葉の定義をする。まず、本当に助けが必要な乞食を〈困窮した乞食〉とする。この集団は、例えば「年金が枯渇した」、「失業してしまった」「食料も買えない」など基本的には一時的にお金がなく助けを求めている人々を指す。次に物乞い行為を職業的に捉えている集団を〈プロ乞食〉とするが、この中でも大きく2つに分類する。一方は生活費として、もしくは生活費の足しとして專業的・副業的に物乞いをする集団。そしてもう一方は特に生活に困っていないが、儲けるためにビジネスとして乞食稼業に従事する集団である。こうしたビジネスとして物乞いをする乞食たちを〈詐欺乞食〉と名付ける。最後に現代ロシアで新しい乞食と呼ばれている、マフィアに雇われて物乞いをさせられているグループを独立させて〈奴隷乞食〉とする。又、「生活費のために物乞いをする〈プロ乞食〉のうち、施しを促すために哀れみを誘う作り話や行動をする人たちは〈詐欺乞食〉ではないのか？」という疑問も浮かぶが、本稿の定義の場合は違法行為でない限りその行為を乞食稼業における専門技術とみなし、〈詐欺乞食〉とはみなさない。複雑になってしまったが、つまりこの分類は並列の関係ではない。例えば1節で述べた帝政ロシアの乞食の大部分は、レヴェンスチムの意見を参考とすると、〈プロ乞食〉ではあるが、生活資金のために物乞いをしていたと考えられるので〈詐欺乞食〉ではないということになる。

バーニス(1974)によると、ロシアが国として乞食と犯罪を結びつけるようになったのは、国家が社会福祉的機能を積極的に担い始めた17世紀後半と重なる。逆説的なように思えるが、つまり国家は貧民を助ける制度を整備する代わりに〈プロ乞食〉を犯罪とみなすという政策をとったのだ。まず、18世紀までの間に最も啓蒙的に社会福祉制度を採用したとみられるヒョードル・アレクセイビッチが、1682年にモスクワの乞食を解体する勅令を出した。その内容は、労働力のない乞食は施設に入れ、健康だが怠け者の乞食には仕事を与えるというもので乞食とホームレスの撲滅を図ることが目的だった。皇帝は勅令の直後死亡したためそれが施行されることはなかったが、後のピョートル大帝（ピョートル1世）に多大な影響を与えた。初代ロシア帝国皇帝でもあるピョートル1世（1682-1725）は、乞食撲滅を最も厳格に目指した皇帝である。そしてヒョードルと同様社会福祉制度の整備にも積極的で、「正直な貧民」を救済の対象とした。一方職業化した乞食は怠け者とみなし処罰の対象とされた。そしてピョートルはロシア帝国建国前の1717年に屋外での物乞い行為を禁じる勅令を出した。ピョートルは乞食を逮捕し、再犯の場合には広場で鞭打ちにしたのち男性の場合はシベリア送りに、女性の場合は強制労働をさせた。更に物乞い行為を根絶させるために、施しを与えた人全てを共犯者とみなし罰金刑に処した。<sup>12</sup>

1節で既に述べたように、ソ連時代の乞食やホームレスは社会主義権力の評判に害を与える者として刑事責任を問われた。社会主義政権下では物乞い行為は寄生的生活とみなされ、そのような生活は「国家のために有益な労働をするべき」という社会主義イデオロギーから逸脱していたのである。<sup>13</sup> つまり、この時代には〈困窮した乞食〉であるかどうか

<sup>11</sup> 表1参照 (p.i)

<sup>12</sup> 前掲記事 «История борьбы с нищенством: отечественный и зарубежный опыт», РИА НОВОСТИ.

<sup>13</sup> 同上

かかわらず全ての乞食が処罰の対象とされた。1951年6月にソヴィエト政権はモスクワ乞食の根絶を目的とした命令を内密に発令し、労働能力のある乞食の場合は5年間遠隔地に送り、ない場合は親族に引き渡すか福祉施設に収容することを決定した。ソ連内務省の秘密報告書によると、1952年には15万6千人、53年には18万6千人もの乞食が逮捕されている。驚きなのは、この逮捕された乞食のうち〈プロ乞食〉の割合はたった10%であり、20%は一時的にお金が必要だった農民、そして大多数を占める70%は戦争で障害を負った者を含む、集団農場に入れなかった軍人であったことである。推測するに、ソ連政府の中では「正直な貧民」という概念が消え、それに付随して「正直な乞食」に対する救済措置もなくなったのではないだろうか。しかし1954年には福祉施設の建設や運営が追い付かなくなり、特に身体障害者を養える場所はどこにも存在せず、結局ソ連警察は拘束した乞食をやむなく解放した。代わりに乞食に対する弾圧策を更に強め、例えば障害を持つ乞食の場合は30日間保護し、彼らの親族を処罰の対象とするなどした。<sup>14</sup>

現在のロシアでは、世の中に多くの〈詐欺乞食〉と〈奴隷乞食〉が存在しているという説が広く知られている。「プロ乞食の真実」などと題した記事を出しているメディアも多数存在する。例えばロシアの社会・経済新聞である新イズベスチヤもモスクワの乞食を詐欺師と奴隷に分類できると報じた。記事によると約40%が食料のために働くマフィアの奴隷で、詐欺師の場合は物乞い活動をする場所代として1日7000～10000ルーブル（1ルーブル約2円）マフィアに支払っているという。乞食の収入は1日15000ルーブル～20000ルーブル程度で、収入を上げるためにできるだけ悲惨なように振る舞っているようだ。手法としては例えば、睡眠薬やアルコールを飲ませた泣かない赤ちゃんを10万ルーブルで買ってきて抱きながら物乞いをするという残酷なものから、若い女性がお年寄りのふりをする安易なものまである。この記事では、乞食への施しは本物のチャリティーの邪魔をする行為であると市民に警告している。<sup>15</sup> 執筆者が行ったアンケートにも、〈詐欺乞食〉の目撃情報がいくつか寄せられた。例えば「2年以上同じ場所にいる妊婦」、「歩いて帰る車いす乞食」などである。

政府も、モスクワ地下鉄にいる乞食の弾圧を強化することを政府新聞にて報告している。地下鉄の乞食に対する罰金を大幅に値上げする法案が2015年5月に承認されたというものだ。それまでモスクワ地下鉄にいる乞食が対象となる罰金は公共秩序侵害に対する100～500ルーブルだけであったが<sup>16</sup>、この改正以降罰金は最大で5000ルーブルに及ぶ。国家院法律分野のリーダーであるアレクサンドル・セメンニコフは、「もし乞食が本当に貧困に陥っているなら、助ける責任は乗客ではなく国家にある」と説明している。<sup>17</sup>

---

<sup>14</sup> 前掲記事 «Сытый голодному не верит -Сколько нищих было в СССР -».

<sup>15</sup> «Как устроена "нищая" мафия в Москве», НОВЫЕ ИЗВЕСТИЯ, 2018, <https://m.newizv.ru/news/society/06-08-2018/kak-ustroena-nischaya-mafiya-v-moskve> (最終閲覧 2018/12/16)

<sup>16</sup> «Штраф в 5000 рублей утвержден за попрошайничество в метро», Милосердие.ru, 2015, <https://www.miloserdie.ru/news/shtraf-v-5000-rublej-utverzhden-za-poproshajnichestvo-v-metro/> (最終閲覧 2018/12/16)

<sup>17</sup> «5 тысяч за спрос», Российская газета, 2015, <https://rg.ru/amp/2015/05/14/metro.html> (最終閲覧 2018/12/16)

表1の乞食の分類を使って2節を簡単にまとめると、1700年代には労働意欲のない〈プロ乞食〉を罪人とみなすようになったが、「正直な貧民」は救済の対象であった。一方ソ連期の乞食は分類を問わず弾圧された。現代ロシアでは〈プロ乞食〉と〈詐欺乞食〉を結び付けて捉える傾向が強くなり、新たに〈奴隷乞食〉というグループが登場した。

### 1. 3 乞食が象徴するものとは —それでも施しをするロシア人—

政府側の乞食弾圧にもかかわらず、モスクワには相変わらず施しを続ける人々の姿がある。アンケートQ2「乞食に施しをしますか？」に対しては、実に69%の人が定期的に行っていると答えた。世代別割合をみると10代は例外的だが、基本的には年齢を重ねるごとに上昇傾向であった。又、乞食ビジネスの存在が施しをするかの判断に影響すると考えている人の割合は若者を中心に高く、30代では100%、全体でも67%に及んだ。<sup>18</sup> つまり、〈詐欺乞食〉を警戒している人の中にも定期的に施しをする人がいるということになる。

そこで、施し行為を後押しする意見も紹介したい。まず、罰金の値上げについて説明していたセメンニコフも、制度の効力を地下鉄に限定した理由について次のように述べた。

「道での乞食は通行人の邪魔をそれ程していない。それ以外にも、ロシアには乞食を積極的に助けようという文化が存在する。例えば貧しい人は昔から教会の周辺に集まって物乞いをしているが、彼らからその権利を奪うのは間違いである。」<sup>19</sup> 彼は、「実際に援助が必要なホームレス5千人のうち2千人が物乞いに従事している。」とも述べた。<sup>20</sup>

BBC ニュースロシアは、罰金を科したロシア政府を警察の圧倒的な調査不足だとして批判的に報じた。記事によると、モスクワの乞食は詐欺師であり、援助されたお金はマフィアに渡るといふ説はよくあるステレオタイプだが、証拠はなく、神話的でさえあるという。同記事では実際に施しによって救われている人の紹介もしており、例えば住宅詐欺の被害に遭い仕方なく乞食になった人や、物乞いで得たお金で孤児院育ちの友人と共にアパートを借りて暮らしている女性のエピソードなどを載せている。この後者の女性は警察から禁止される前まで地下鉄で物乞いをしていたそうだが、家を手に入れて自立して暮らすために今はモスクワを去りたいのだと明かした。<sup>21</sup>

話題を施しに戻すが、アンケートにて「定期的に施しをする」と答えた回答者のうち44%が「条件付きで」と答えた。条件の多くは誰が物乞いをしているかに依るものだった。1番多かったのは「お年寄りに」の16人。2番目は「楽器の演奏をしていたら（歌・ダンス・詩を含む）」の11人だった。又、人物に対する条件ではないが、「食費・交通費としてなら」も6人と指摘数が多かった。他に「教会付近でなら」という条件も少数なが

<sup>18</sup> アンケート資料 1-1 (p.ii)

<sup>19</sup> «Штрафы за попрошайничество предлагают увеличить до 5 тысяч рублей», Москва 24, 2014, <https://www.m24.ru/amp/articles/metro/22052014/45372> (最終閲覧 2018/12/16)

<sup>20</sup> Олег Болдырев «Штраф в протянутую руку. Зачем в Москве хотят наказывать попрошаек?», BBC NEWS РУССКАЯ СЛУЖБА, 2016, [https://www.bbc.com/russian/society/2016/03/160304\\_moscow\\_paupers\\_criminal](https://www.bbc.com/russian/society/2016/03/160304_moscow_paupers_criminal) (最終閲覧 2018/12/16)

<sup>21</sup> 同上

ら存在した。<sup>22</sup> 「お年寄り」に援助をすると答えた人は共通して年金について言及しており、どうやらロシアには、家族からの援助がない年金生活者の暮らしはとても厳しいという共通認識があるようだった。あるニュースサイトも、物乞いをしている高齢女性に対してインタビューを行っていた。女性は乞食稼業が必要な理由として、年金の少なさや家賃を含む公共料金の値上げが影響していると語っていた。<sup>23</sup> 次に楽器を演奏している乞食に施しをしたい人の割合が高かったのは興味深かった。回答者は彼らを「努力している乞食」として評価していた。その他の条件について、使い道の指定や現物支給的な援助を望む意見は嘘や詐欺の警戒、教会付近という場所の指定は宗教と施しの関係を示唆するものだと言えるだろう。アンケートにて定期的に施しをすると回答した人に理由を尋ねたところ、多い順に「自分よりもお金が必要だから（15人）」、「努力しているから（11人）」、「働けなさそうだから（6人）」、「宗教の教え（5人）」、「かわいそうだから（5人）」、「お金・小銭があったから（3人）」と続いた。アンケートの結果を踏まえると、現代ロシア人は〈詐欺乞食〉を避けて、本当にお金が必要な〈困窮した乞食〉に施しをしたいと考えていることが分かる。さらに楽器の演奏者のような〈詐欺乞食〉以外の〈プロ乞食〉にも寛大で、「努力しているかどうか」がキーワードのようだった。ちなみに予想外だったのは、〈奴隷乞食〉に対しても同情的な意見が多く寄せられたことである。理由としては、例えば「奴隷乞食に施されたお金が本人たちに渡らないことは分かっているが、彼らがマフィアにリストラされないために施す」などが挙げられていた。<sup>24</sup> 又、世代が上の回答者に施しをする人の割合が高かったのは、ソ連時代に〈困窮した乞食〉も処罰されていたことを知っているからではないだろうか。年金生活者に近づくにつれて貧困への不安が高まり、同時に同情も強まっていると考えることもできる。

乞食をジャンルに分けると、「年金生活者」、「障害者」、「病気の子どもを持つ親」、「妊婦」、「傷病兵」など一部を除き伝統的貧困者（仲村ほか監修 2005：140）と一致する。又近年新たに、ウクライナの偽パスポートを持った乞食の存在が報じられた。恐らくこれは紛争が悪化したことでロシア側が受け入れるウクライナ難民の数が増えている実情に便乗したもので、<sup>25</sup>例えば「ウクライナの銀行がストップし、ウクライナ難民はお金を下ろせなくなった」といったニュースは国民の同情を誘ったことだろう。偽パスポートを持っていたこれらの乞食が貧しい〈プロ乞食〉なのか、それとも単なる〈詐欺乞食〉なのかは分からない。ただ一つ言えるのは、乞食とは金銭的援助が必要な人々、もしくはそれを表現する人々であり、本物かどうかにかかわらず金銭的弱者の象徴であると言えるだろう。

## 2. ロシア人と貧困

---

<sup>22</sup> アンケート資料 1-2 (p.iii)

<sup>23</sup> «Почему пенсионеры просят милостыню», Салават News, 2017, <https://slvnews.ru/society/700> (最終閲覧 2018/12/17)

<sup>24</sup> アンケート項目 (p.ii)

<sup>25</sup> Валерий Мельников «Нищие примерили украинский образ», газета.ru, 2015, <https://m.gazeta.ru/social/2015/04/08/6631017.shtml> (最終閲覧 2018/12/17)

1章で「ロシア人にとって乞食は金銭的弱者の象徴なのではないか」と述べたが、彼らに積極的に施しをするロシア人は金銭的弱者への同情心が強いとは言えないだろうか。そこで2章ではロシアの貧困や社会保障についてまとめ、その特徴について考察することで、ロシア人にとって貧困者とはどのような存在なのかについて検討したい。

## 2. 1 時代別にみる貧困と社会保障

### 2. 1. 1 帝政末期の貧困と社会保障

帝政ロシア期の人口のうち大部分は農民であった。1897年の国勢調査によると約8割の国民が農民だったという。帝政末期に貧困に苦しんだ人々の多くもこの農民であり、その象徴として「出稼ぎ・副業」が挙げられる。彼らは農業だけでは生活していけず、慢性的な食量不足にも悩まされ、出稼ぎなどの副業に従事せざるを得なかった。特に出稼ぎが盛んになったのは1861年の農奴解放以降で、1870年代末から1880年代にかけて文化として定着したと言われている。高田(2007)によると帝政末期には5人に1人が出稼ぎをしていたことが分かっており、当時の家族構成人数は6人が平均だったことを考慮すると、実に1世帯につき1人強が出稼ぎに勤しんでいたことになる。つまり、出稼ぎは貧農だけが行えばよいものではなかった。農民にとって出稼ぎは大きな負担であり、期間が半年を超えることもよくあった。男子の場合基本的には10代前半で出稼ぎを始め、その後労働能力を喪失するまで都市と故郷を行き来する放浪生活を送らなければならなかった。しかも彼らの身分は地元労働者よりも低く、例えば工場出稼ぎの場合、不景気の際の人員削減では真っ先に「出稼ぎ者」がターゲットにされた。しかし19世紀後半に行われた『モスクワ県統計資料集』によると当時の農家の農業収入は総収入の半分を下回っており、過酷で不安定であったとしても農民は出稼ぎから逃れる選択をするのは難しかったと言える。

では帝政末期に農民を貧困から救う制度はなかったのだろうか。農奴解放後農民には国税・ゼムストヴォ税・ミール(共同体)税が課され、農村共同体を基礎とする村団が連帯責任の原理を用いて徴収していた。しかし、税負担が増えてもなお社会福祉的機能は慈善団体に寄り掛かったままで、年金も一部の特権階級にしか支給されなかった。ゼムストヴォとは農奴解放後の法令で誕生した地方自治機関で、公的機関としては救貧活動に最も積極的に取り組んだ。しかし仲村(1998)は、「救貧活動は慈悲で賄うべきで、制度化した社会福祉は無慈悲さや抑圧と結びついている」という信仰が広く持たれたことで、ロシアの公的な社会福祉はなかなか進歩しなかったと分析している。現に19世紀末にはゼムストヴォが置かれた県だけでも150万人の極貧者がおり、それを公的扶助で賄おうとすると年額3億ルーブルが必要だったが、実際に支払われたのは9万ルーブルだけだったという。

このように帝政末期の社会福祉は、貧者への恩恵であり権利ではなかった。慈善による救貧活動にも限界があったため、貧困は農民を中心にかなり広範に存在していた。

### 2. 1. 2 ソ連期の貧困と社会保障

十月社会主義革命の指導者であったウラジミール・レーニンはソヴィエト政府を立ち上げ、1922年にはソヴィエト社会主義共和国連邦が成立した。レーニンは国家で財産を共有することで平等を実現しようとする共産主義を目指した。銀行の国有化などの社会主義政

策は次々に進められ、帝政時代の福祉施設も国有化された。つまり、ソヴィエト政府は社会福祉を国家の責任で担うべきものだと思なした。そのため帝政時代までの慈善としての福祉は否定され、教会も福祉事業に携わることができなくなった。

ソ連の社会保障は帝政期の低水準なもの比べるとかなり改良されたと言える。社会保障の対象が全ての勤労者・市民になったことが最大の成果ではないだろうか。医療や教育は無償化し、幼稚園や保育園も基本的には無料で利用できた。年金や手当の水準も高められていき、給付の種類も増えた。コムナールカと呼ばれる無料の共同住宅も提供され、電気やガスなどのライフラインにもほとんどお金が要らなくなった。1929年の世界恐慌で資本主義国が貧困・失業などの大混乱に陥る中、ソ連はあまり影響を受けなかったことも社会主義体制の成果である。それどころかその頃には失業自体がほとんど起こらなくなっていたため、1930年には失業保険も撤廃された。このように、ソ連時代には経済格差の縮小と貧困水準を下げることに一定の成果を上げたと言えるだろう。

しかし全てが順調に進んだわけではない。そもそも革命前は戦時中であり、政府はあらゆる犠牲を払って平和を手に入れたのである。その代償の1つとして巨額の賠償金の支払いがあり、国家の財政は危機的状況、そして食糧危機・モノ不足も深刻化していた。政府は全てを順調かのように謳ったが、実際社会は動乱の中にあり経済も混乱していたのである。それにもかかわらず、ソ連の社会保険は原則として勤労者の負担はなく資本家と国の全額負担で実施されていたため、賃金や年金の水準は相対的に低かった。さらに、労働の質が賃金に結びつかないことや生産年齢時代の働きぶりが老齢年金に反映されにくいことが労働意欲の減退を招き、国家としての労働力不足にも悩まされることになった。

平等を掲げるソヴィエト連邦だが、実際は格差も貧困も存在していたと言われている。しかし武田（2011）は、ソ連の貧困研究は発展していないと言う。当時、貧困や不平等に関する研究がタブーとされていたことが大きな原因で、研究者すらデータのアクセスに制限をかけられていたようだ。そもそも社会主義体制の下では「貧困」という言葉ではなく「物質的に恵まれない状態」と表現されていた。公式な貧困線は定められていなかったが、仮に貧困線を最低消費バスケットの基準をもとに50ルーブル/月に定めた場合、ソ連中期である1950年の時点では70%、1960年で30~40%が貧困者に該当していたと推定されている。この二期間で貧困者比率が大きく減った要因には、政府が1956~68年に貧困削減政策の一環として最低賃金を上昇させる対策を行ったことが挙げられる。ただし政策的に貨幣賃金が低水準で固定化されていたため、国民の過半数は相変わらず貧困状態だったと言えるかもしれない。

ソ連時代の貧困者として第一に挙げられるのは子どものいる世帯であった。McAuley（1979）の推計によれば、全貧困世帯のうち子どものいる世帯が、1965~68年の時点で90%前後も占めていたとされる。特に子どものいる農民世帯は大変で、それには年金の不平等さが関係している。又、援助してくれる親族のいない年金生活者も貧困に陥りやすかった。ホームレスも存在していた。（武田 2011:85-92）

社会保障の不平等さについても指摘したい。まず、農民に対する社会保障は財政的な理由から長い間行われてこず、基本的に彼らは相互扶助で家計難を乗り越えることが求められた。農民への年金対策は1964年になってからようやく始まり、これによって彼らは相互扶助に頼っていたころよりは確実な保障が得られるようになった。しかし農民は副業収

入（家庭菜園などを含む）を得られることが前提とされていたため予め減額した年金が支給されており、非農業部門退職者と比較すると見劣りするものだった。国から「寄生的存在」や「怠け者」という刻印を押された農民も、実は貧困に苦しんでいる場合があったのだ。農民はソ連崩壊寸前の1986年によく100%の年金がもらえるようになったが、ソ連期の農民への貧困対策は長期間酷いものだったと言える。他にも、政府が経済的躍進にとって重要でないとみなした貧困者たちは積極的に救貧されなかった。例えば乞食や浮浪者などがその中に含まれ、彼らの自力更生に対しての給付は一切支払われなかった。逆に、特別階級と呼ばれる人々の生活は着実に向上していった。その階級には首相や官僚はもちろん、議員や大学学長、労働組合の幹部も含まれる。ソヴィエト国家に華々しい貢献をしたとみなされた人及びその家族への年金額も、通常より遥かに高かった。

以上のように、ソ連時代の社会福祉は相互扶助を除き国が全面的に担っていた。帝政期と比べると貧困の軽減や格差の是正に一定の成果を上げたと言える。ただ、性急に改革が行われ過ぎたことや、財政難にもかかわらず国がほとんどの出費を賄おうとしたことで賃金や手当は低水準に留まり、国民の生活水準は全体的に低かったと言える。そして何より、平等を掲げていたソ連にも貧困や不平等が存在していたことが明らかになった。

### 2. 1. 3 ソ連崩壊後の貧困と社会保障

1986年のチェルノブイリ原発事故は、ソ連の経済・政治がいかに遅れているかを世界に知らしめる結果となってしまった。これをきっかけにゴルバチョフ党書記長はロシア語で建て直しを意味する「ペレストロイカ」を本格化させていく。経済改革として、1990年代初めまではあくまで社会主義の修正を目的とした一部市場的要素の導入が進められた。しかし経済は活発化せずモノ不足だけが深刻化したため、1990年の夏頃、政府はとうとう本格的に市場経済への移行を目指し始めた。市場経済への移行が本格化すると、1991年には物価が3倍にまで跳ね上がった。そして同年12月にCIS（独立国家共同体）の設立協定に調印したことでソ連は崩壊し、ゴルバチョフは辞任となった。

ロシア連邦成立後の経済は壮絶であった。エリツィン大統領の元で政府は、1992年1月に「ショック療法」と呼ばれる急激な価格自由化に踏み切った。この急進的な改革はとも国民に配慮があるようには思えなかった。予想通り経済は混乱し、ハイパーインフレーションが起きた。インフレの規模は想定以上で、同月中に消費者物価上昇率は460%を超え、エリツィンも政策の誤りを認めるに至った（栗生沢2016）。ロシアの移行不況は長引き、GDPは1998年には1989年の55.8%まで下がっていた（武田2011）。貯蓄の価値はほとんどなくなり、国民の生活水準は悪化、貧困者数も急増した。移行前の1991年の時点で貧困者比率は約11%だったのに対し、92年には33.5%まで急上昇した（武田2011）。そして、2000年までに貧困を経験した人はなんと約7割にも及んだ。

では、具体的にどのような貧困が起きたのであろうか。移行開始当初は、移行不況により大量失業が起こると予測されていた。しかし結果的に企業は将来の生産回復を想定して労働力の抱え込みを行ったため、失業率は緩やかにしか上昇しなかった。その代わりに企業は賃金の支払いを遅らせたり、従業員に短時間労働や休暇を強制するなどした。全国平均賃金は1995年には91年の43.3%に、農業部門を対象を絞ると15.1%にまで落ち込み、結果的に国民の多くはワーキングプアに陥ってしまった。武田（2006, 2011）

移行経済下における貧困者の増加としてワーキングプア以外にも子どものいる世帯が挙げられる。ソ連時代も子どものいる世帯の貧困率は高かったが、ソ連が解体したことによる育児支援の弱体化も影響して状況はより深刻化した。例えば武田（2011）によると、1998年の児童手当受給者（1.5歳まで）はたった1.1%だけであったが、貧困リスクは55.9%という高い水準を示した。特に多子家庭は深刻で、子どもが3人以上いる家計の貧困リスクは79.6%にまで及んだ。このデータは、子どものいる世帯の貧困の深刻さだけでなく手当自体の不足も示している。

年金生活者も貧困に苦しんだ。年金は賃金と違って物価に合わせたスライド制がとられたため、ワーキングプア程深刻ではなかったという解釈もある。しかし年金額の最低生活費に対する比率は下がり、遅配も起こったため苦労した高齢者がいたことは確かであろう。百瀬（2002）によると、この頃には物乞いをしたりゴミ箱を漁る高齢者が多く目撃されたそうだ。老齢年金は最低生活費を下回らないように設定されていたが、医療費を含む高齢者特有の出費を加味すると、親族の援助なしでの生活は困難だった。

市場経済に移行したことの最大の特徴として貧富の差の拡大が挙げられる。貧困者の増加だけではなく、貧困の深さを表す貧困ギャップの比率も急激に悪化した（武田 2011）。例えば最貧困層と考えられるホームレスは、ソ連崩壊後一気に増加したと言われている。仲村（1998）によると、ロシアはホームレスの援助が進んでいる国とされており彼らは施設に入ることができた。しかし施設的环境はまるで牢獄のように劣悪だったという情報も後に公となっている。1992年から施行された国家年金法は、ソ連時代とは違い全ての市民を対象としているためホームレスにももちろん受給権がある。しかし実際は住所特定が難しいことなどを理由に支給が進んでいない（仲村ほか編 1998:125-127）。

このような移行不況は2000年代の経済成長まで続いた。経済・政治専門家は、1999年の時点では未だに7000万人の国民が食糧を十分に買えない生活をしており、48.5%の人が貧困線以下、68.7%の人が平均所得以下であったと分析している。低賃金や、給付の遅配、物価の上昇などが国民を苦しめ、彼らは親族との相互扶助やご近所との物々交換、家庭菜園などに頼った生活を送ることを余儀なくされた。<sup>26</sup>

## 2. 1. 4 2000年以降の貧困と社会保障

1998年の金融危機の後、原油価格の高騰・ルーブル安という好条件に恵まれ、2000年代にロシアの経済は急速に成長した。大統領もエリツィンからプーチンに代わり、強いロシアの復活を目指した。経済成長は、ソ連崩壊後に弱体化したロシアの社会保障制度の強化を後押しし、移行不況期に比べて貧困者数は確実に減少している。

では、2000年以降の貧困問題の解決は順調なのであろうか。まず貧困者比率であるが、移行不況のどん底だった頃、実質的には約7割の人が貧困者だったと言われている。ところが2000年には29.0%、2002年には25.0%、2013年には10.8%と順当に減少してい

---

<sup>26</sup> Людмила Игоревна Кравченко «Бедность в России: не 20, а 70 миллионов россиян», Центр Сулакшина, 2016, <http://rusrand.ru/analytics/bednost-v-rossii-ne-20-a-70-millionov-rossiyan>（最終閲覧 2018/12/18）

る。貧困の深さを示す貧困ギャップも2000年には9.2%だったが、2013年には4.0%まで減少した。このように経済成長と共に貧困及び貧困の深さの改善はみられている。

一方で所得格差については一向に改善がみられず、むしろ広がっていると言える。所得分配の不平等さを測るジニ係数をみてみると、1989年は26.5%であったが、1993年には39.8%まで上がり、2007年には42.3%に達した。モスクワのNPO法人であるНФПКが2007年のロシア連邦国家統計サービス(РОССТАТ)による調査を行った結果、モスクワで所得の多い上位10%の人々の収入は、下位10%の人々の収入の41倍にも及んでいるという。この数値は、ヨーロッパで6~9倍、アメリカでも10~12倍を示し、ロシアの貧富の差がいかに進んでいるか表す結果である。НФПКは他にも、モスクワに住む中流階級の人々が自分たちの生活を貧しいとみなしていることを問題視しており、モスクワの法的な貧困者比率は20%前後だが、実際は35~38%だろうと推測している。<sup>27</sup> ロシアが累進課税制度を導入していないことも所得格差を拡大させる原因の1つだろう。

上述のように、2000年以降の経済成長は必ずしも最貧困層の救済として役立っているとは言えない。武田(2015)は、このような状況下での貧困緩和や格差緩和の実現としては生活保護政策の役割が重要だと指摘している。そこで、2000年以降の生活保護政策、並びに新年金制度について検討していきたい。

武田(2015)はロシアの生活保護政策について、移行不況期の経済混乱のよって整備が全く進んでいなかったが、2000年代になってようやく整い始めたと述べた。2000年に国家社会扶助法が施行され、現行法としては2014年の改正版が敷かれている。受給資格者は、「貧困家計・貧困単身家計・そのほかの市民カテゴリー」と定められており、連邦の定める最低生活費を下回る所得の場合受給資格が得られる。そのほかの市民カテゴリーには主に戦争関連の条件が多く、戦争で障害を負った人や大祖国戦争に参加した人などが組み込まれている。障害児童なども対象だ。2009年改正版以降からは年金生活者への社会的追加払いも定められた。しかし、この社会扶助法にはまだ欠陥がある。のちに詳しく述べるが、移行不況後の貧困者の代表的なカテゴリーは子どものいる勤労世代である。しかしながら度重なる法改正を経ても扶助対象として注目されるのは年金世代や退役軍人ばかりで、その点でこの法律はターゲティングを失敗していると言える。さらに、生活保護の捕捉率が極めて低いことも問題で、2009~2013年の貧困者捕捉率は15.2~20.3%を示している。この数値はドイツの半分、イギリスの4分の1程度にしか満たない。

年金制度も2002年に新しくなった。大きな変化は、積み立て方式の導入によって資金調達が可能になったことである。導入の背景には物価上昇が落ち着き、年金の遅配もなくなったことが挙げられる。年金の支給額については2000年以降実質的に向上してはいるものの、平均年金がようやく最低生活費を超えた程度である。政府は年金の基礎部分を最低生活費まで引き上げることを目標にしているが、2006年の時点では35.7%までしか達していない。岡田(2006)は、実際年金生活者の9割は生活に不便を感じ、6割は薬代すら払っていないという報告について言及している。

---

<sup>27</sup> «Богатые и бедные в Москве и России», НФПК,  
<http://files.school-collection.edu.ru/dlrstore/00000c51-1000-4ddd-517d-3600483aebf5/@001420.htm> (最終閲覧 2018/12/18)

このように、制度自体は新しくなっているものの相変わらず貧困層を救い切れていない。アンケート Q6「最貧困層に対しての社会保障は十分だと思いますか？」に対しても「はい」と答えたのはたった 8%の人だけであった。不足しているものとしては、「社会的弱者への手当」や「年金」に加えて、「給与」や「(適切な賃金の)雇用」などワーキングプアの存在をほのめかす意見も多かった。<sup>28</sup>

ロシアの社会・政治紙は、現代の主な貧困者カテゴリーについて報告している。記事によると、最も深刻なのは子どものいる世帯で、ロシアでは第二子が生まれると途端に貧困に陥るリスクが上がるという。ロシアの高等教育機関が 3000 人を対象に行ったアンケートによると、子どものいる世帯のうち 23.4%が貧困に陥っていた。特に、片親世帯は 35%、障害児を持つ世帯は 37%、母親が 50 歳以上の世帯は 43%が貧困世帯に該当した。多子家族の貧困も深刻で、3 人以上子どもがいる世帯のうち、予想外の出費に対応できない家計は 78%にも及んだ。次に問題視されていたのはワーキングプアである。2014～17 年の不況での賃金低下の影響もあり、未だにその数は増え続けているという。又、年金生活者も貧困リスクが高いそうで、年金を受給していると公式には貧困者数にカウントされないが、彼らが被扶養者を抱えている場合は乞食になってしまうリスクもあるらしい。<sup>29</sup>

最後に、近年新たに問題になってきた待機児童についても言及したい。ロシアでは 2000 年代にベビーブームが到来したが、ソ連崩壊以降依然として保育施設が減少を続け今や当初の半分以下である。村知(2015)は、ロシアの子育て支援は民間の取り組みが成長しておらず、国がすべて賄おうとしていることを問題視している。結果的に 2013 年には 270 万人の待機児童が認められ、女性のワーキングプアを生み出す要因にもなっている。ロシアの離婚率は極端に高く、片親世帯も多いので状況はかなり深刻である。

このように、2000 年以降は経済成長の効果もあり貧困問題は少しずつ改善しているが、依然として問題は山積みである。そもそもこの経済成長自体もエネルギー資源の価格に依存しているため、いつまで続くか分からない。実際に、順調に経済成長を続けてくはずだった 2008 年にはリーマンショックが起これ、路上には新入りの高齢者の乞食が増えたと報告されている(下斗米ほか編 2012:184-189)。今後は社会保障の改革を続けていくのはもちろん、財源とも相談した、持続可能で経済ショックに強い貧困対策を模索していく必要があるだろう。

## 2. 2 ロシアにおける貧困の特徴

### 2. 2. 1 恐怖政治と一斉貧困 —ソ連の歴史と貧困—

ソ連崩壊からもうすぐ 27 年経つが、今もなおその時代を生き残った人は多い。歴史的に特異だった社会主義体制下の記憶は今でも鮮明に刻まれているのではないだろうか。そこで、ソ連時代の歴史を追いながら、ロシア人と貧困の関係性について探っていきたい。

---

<sup>28</sup> アンケート資料 2-1 (p.iii)

<sup>29</sup> «Бедность в России : десятки миллионов за чертой», газета.ru,2018,  
<https://m.gazeta.ru/amp/business/2018/05/09/11745109.shtml> (最終閲覧 2018/12/18)

1917年のロシア革命をきっかけに帝政が幕を閉じた。当時国家では第一次世界大戦の影響で労働力不足やモノ不足が深刻化していた。そこで、成立したばかりのロシア社会主義ソヴィエト共和国を率いていたレーニンは「戦時共産主義」を敷いた。戦時共産主義とは生産活動の維持・復興のために全工業を国有化すること、そして食糧確保のために穀物を国家が独占することを意味している。農民は当然強く反発し、見返りのない穀物の引き渡しを拒んだが、政府は特にクラーク（富農）から強制的に穀物を徴発した。反乱に対しても、毒ガスなどを用いて無理矢理鎮圧した。大戦・内戦の影響でロシアの経済は破綻していたため農民だけでなく全ての国民の不満は爆発していたが、政府はこうした政策を貫徹させるためにより強靱な中央権力を築いていった。

しかし戦時共産主義は国民の不満増大だけでなく意欲もそぎ落とし、生産力は更に落ちた。そこで行われたのがネップ（新経済政策）である。これは小工業の国有化を解除するとともに、農民に対しても一定の現物税を納めれば穀物の自由売買を許可するという一種の譲歩的な政策だった。ネップは国民の労働意欲を復活させ生産力は回復していった。

1922年になるとレーニンに代わってスターリンが指導者となる。スターリンは「一国社会主義」、つまりレーニンより厳格な社会主義を唱えた。1927年頃から政府が穀物調達危機に見舞われると、スターリンは穀物を強行的に調達するための制度を敷くようになる。まず「非常措置指令」によって、穀物を納めない農民全員を穀物を隠蔽しているクラークとみなし刑事罰・行政罰に処した。さらに合理的な農業を目指して農業集団化を急速に行った。集団化とは農家をソフホーズ（国営農場、賃金は国家から支払われる）とコルホーズ（耕地等を共同化して農民が自ら経営を行う）に分けることで、これに反対する農民もクラークとして逮捕した。困窮した農民による少しの穀物窃取に対しても銃殺刑などに処した（下斗米ほか編 2012:44-51）。この時期に追放された農民は1000万人とも言われており、農民が政府の恐怖に脅かされながら生活していたのは確かであろう。ネップ制度も自然に崩壊していった。1930年には強い指令と従属の関係を象徴とする「スターリン体制」が確立する。そして皮肉なことに、スターリン独裁が頂点に達したことで社会は安定を実感することができた。国民は、経済を優先した政策のせいで相変わらず苦しい生活を強いられていたが、前年の世界恐慌による影響をソ連がそれほど受けなかったことで強いロシアの復活を信じていた。その後も恐怖政治は止まらず、むしろエスカレートしていく。1936年～38年頃にはスターリンによる反対派大虐殺、通称大テロルが行われる。この大テロルの犠牲者の総数は諸説あるが、30年代のスターリン体制での犠牲者の数は、飢饉なども合わせると2500万人にも上るといわれる（栗生沢 2016:141）。テロルは指導者に集権することを意味し、スターリンはこれによって国家の安定を築いていった。

スターリンが死去するとフルシチョフが筆頭書記となった。彼はスターリンに批判的な態度をとったが、一方でスターリンを偉大な指導者と考えている党员や国民は意外と多かった。フルシチョフは強制収容所の人々の解放や国民の生活の改善などを精力的に行ったが、農業政策の失敗を機に失脚した。（栗生沢 2016）

その後党第一書記はブルジネフに移る。彼は積極的に社会福祉の整備を行い、国民の生活保障を行った。その一方で社会主義体制はスターリン時代のものが維持された。ブルジネフの時代には「暗黙の社会契約」が成立したと言われている。栗生沢(2016)の説明に基づく、「暗黙の社会契約」とは民衆が国家体制に異議を唱えさえしなければ、国がある

程度の生活と安全を保障するという契約である。大人しくしていれば国家が面倒を見てくれるという安心感すらソ連国民は抱いていたようだ。その後 1985 年にゴルバチョフが党書記長になりペレストロイカが始まると、ソ連は終焉に向かっていく。

このように社会主義体制下では、国民がある程度一斉に生活苦を味わうこととなる。国家が軍事や重工業、宇宙開発など特定の分野にお金をつぎ込めば国民は一斉に貧しくなるし、新制度が導入されても同様のことが起こる。ソ連期の貧困は強すぎる国家権力と共にあり、国民にとっては免れることのできない存在だったとも言えるのではないだろうか。

## 2. 2. 2 一時的貧困

ソ連崩壊後のロシアでみられる貧困の特徴として「一時的貧困」の多発が挙げられる。これは武田（2004）で用いられている分類で、これに「非貧困」と「慢性的貧困」を加えた 3 つのカテゴリーから成る。基にしているデータはロシアの長期モニタリング調査（RLMS）で、これはロシアの貧困動態の分析を可能にする唯一のデータである。武田は、1994～2000 年を 4 地点に区切り（1994, 1996, 1998, 2000 年）貧困動態の分析を行った。そして、4 地点全てで貧困線を下回った場合を「恒常的貧困」、3 地点で下回った場合を「多発的貧困」とし、この 2 つをまとめて「慢性的貧困」と分類した。又、2 地点もしくは 1 地点でのみで下回った場合を「一時的貧困」と分類した。全ての地点で貧困線を上回ったグループは、「(継続的) 非貧困」と分類される。この推計結果によると、1994～2000 年に一度でも貧困に陥ったことのある人は 66.2%にも及んだが、このうち恒常的貧困だった人はたった 7.7%だった。カテゴリー別の数値は、一時的貧困が 45.3%、継続的非貧困が 33.8%、慢性的貧困が 20.9%となった。これはつまり、経済ステータスを移動している人が多いことを意味し、ロシア家計の経済的不安定さを表す結果である。

経済ステータスの移動は大都市で特に多く起こっていた。武田(2004)はロシアの地域を「二大都市（モスクワ・サンクトペテルブルグ）」、「その他の都市」、「農村」に分けて数値を分析した。それによるとロシア全体での経済ステータスの移動率は 58.5%なのに対し、二大都市は 64.1%を示し 3 つの地域区分で最大の値となった。一方、二大都市での継続的非貧困者数の割合と恒常的貧困者数の割合はどちらも 3 つの地域区分で最小の値を示している。これを踏まえると、二大都市の家計は特に経済的に不安定で貧困に陥るリスクが高いが、貧困から抜け出すチャンスも大いにあるとすることができる。

又、都市部（二大都市とその他の都市）においては雇用維持が非貧困を維持するために重要な条件となっていた。理由としては、農村部の方が個人的消費を目的とした菜園経営が盛んであり収入がなくても食料調達に困らないことや、地縁の強さ、すなわち相互扶助文化の根強さがあるからだと推測できる。農村部には非経済活動人口が相対的に多いが、その理由も同様であると考えられる。現に、農村部の年金生活者の貧困者比率は低い。一方都市部では、失業と共に貧困に陥る可能性が極めて高い。ただし都市部の慢性的貧困者のうち勤労世代のほとんどは就業を維持している。これはつまり、低い賃金の仕事に従事し続けている人の存在を表しており、雇用維持が貧困の防御策に繋がりがやすい都市部の労働者は、失業をするよりは低賃金の仕事の継続を選ぶ傾向が強いと言える。

最後に、職種と経済ステータスの関連について述べたい。1994 年～2000 年の時期において、一時的貧困と職種の大きな関連はみられなかった。一方、慢性的貧困者は事務的職業や初級職業（サービス業、農林漁業、機械操作員など）に従事している傾向が強く、継

続的非貧困者は専門的職業や管理的職業に従事している傾向が強かった。つまり、一時的貧困は誰もが陥る可能性が高かったが、同じ経済ステータスを維持している場合は職種との関連が比較的大きかった。

このように、1994～2000年のロシアでは経済的に不安定な生活を送った人が多かった。この時期のロシアの貧困は脆弱性が極めて高かったと言え、貧困でない人々の生活水準も不安定な状態にあった。つまり、当時のロシア人にとって貧困は特定の人のものではなかったと言える。さらに、経済ステータスの移動の激しさは社会的支援のターゲットングが難しくなることも意味する(武田 2011)。そのため国からの支援を必要な人の元へ届けるのは、少なくとも当時のロシアでは非常に難しいことだったと言えるだろう。

## 2. 3 ロシア人にとって貧困とは

1節、2節を通じてロシアの貧困やその特徴、国家からの保障について述べてきた。これらを踏まえて、ロシア人にとって貧困とは何なのか、彼らの目には貧困者、つまり金銭的弱者はどのように映っているのかを考察したい。

まず、帝政ロシア末期から現在のロシアまで貧困は絶えず存在していた。それも時代によって貧困者比率は大きくぶれているものの、貧困者数は決して小規模ではなかった。さらに、貧困者の代表的なカテゴリーとしてしばしば上位にいたのは「子どものいる世帯」、「ワーキングプア」、「年金生活者」で、特に子どものいる世帯はほとんど全ての時期で半数前後が貧困に陥っていた。「子育て」、「労働」、「退職」は多くの人々が人生で経験するステージだと言えるだろう。このように貧困とはロシア人にとって身近な存在であり、かつ貧困者の代表的カテゴリーは誰もが共感しやすい金銭的弱者の像であった。

貧困に陥るリスクの高さも貧困を身近に感じる要因になるだろう。ソ連崩壊後の経済ステータスの移動の激しさは、誰もが貧困を経験する可能性が高かったことを意味している。一時的貧困や貧困経験者の多さは数値からも明らかだった。特に一時的貧困に陥るリスクは職種等にほとんど関係がなく高かった。この事実は、資本主義国家になった後も、貧困は特定の人だけに起こる問題ではないという認識をロシア人に与えているのではないだろうか。

国家の政策や経済ショックに度々振り回されていたというのもロシアの貧困の特徴である。顕著なのがソ連成立から崩壊後の移行不況の時期で、経済システムの転換でモノ不足やインフレが起きたり、国家が特定の分野にお金をつぎ込むことで国が一斉に貧しくなった歴史がある。スターリンを中心とした恐怖政治により理不尽な穀物徴収を受けた農民たちもその犠牲者であるし、ソ連崩壊後、もらえるはずの年金がもらえなくなった国民も犠牲者であろう。この期間は国民がある程度同時に経済難を感じる「一斉貧困」の時代であったと言える。同じような困難を乗り越えた国民同士は運命共同体のようなもので、仲間意識を芽生えさせたかもしれない。又、こうした時代に人々は、貧困の原因を「個人」ではなく「国家」に求める傾向があったのではないかと考えられる。

では、このように貧困と隣り合わせだったロシア人はそれをどのように乗り越えてきたのだろうか。彼らが頼りにできるものとしてまず思いつくのが国家からの手当である。しかし既に1節でみてきたように、ロシアの社会保障に国民が頼れるような基盤があったと

は言えない。帝政末期からの約 150 年で、それなりに社会福祉制度が整備されていたのはソ連時代の終盤と、移行不況から抜け出して改革が始められている近年だけだと言えるだろう。それですらまだ十分だとは言えないし、既に述べたように現在の経済成長すら持続可能かは怪しい。そしてショック療法、金融危機により 2 度も国に預けた貯金が紙屑となる悲劇を経験した国民が全面的に国家に信用を寄せているとも考えにくい。執筆者が現地を感じた、「貯金をしないロシア人が圧倒的に多い」という特徴も、国家の経済情勢を信じ切っていないことに由来するかもしれない。

武田 (2006) は、1994~2000 年の RLMS データを基にして、経済ショックに対する家計の 4 つの適応行動を分析している。適応行動①は人的資本の利用で、副業や転職など就業に関連する行動である。適応行動②は物的資本で、家庭菜園をしたり所持品を売ることがこの中に入る。適応行動③は援助を求めることで、求める先としては親戚や友人などが挙げられている。適応行動④は節約することである。この中で最も多く選ばれたのは④の節約であった。しかし、②物的資本や③援助を求めた人も多く、どちらも④節約の約半数の人が選択していた。ちなみに①人的資本を選択した人は④節約を選んだ人の約 4 分の 1 に留まったが、都市に絞るとその値は少し大きくなった。これらの結果から、ロシア人は貧困に陥った際に国からの援助を求めるだけではなく、親戚や知人に援助を求めることや家庭菜園をすることで貧困防衛をしていることが分かる。

国家の社会保障システムも、国民の相互扶助や家庭菜園のような副業収入に期待していた側面が認められる。高田 (2007) によると帝政ロシア期の帝国中央権力も、国民のツァーリ (皇帝) 崇拝や正教信仰に依存して農民を直接的に支配することを放棄していた。具体的に言えば、救貧活動として教会による慈善活動に頼ったり、村団や農村共同体にある程度の権力を与え、納税の連帯責任システムや相互扶助などを促していた。共同体は当時国家権力による支配の末端機関を担っていたと言われている。ソ連時代においても、1 節で述べたように財源不足の影響で、長い間農民には年金を与えず相互扶助によって生活することを強いていた。法改正後も農民には副業収入を期待し、減額した年金を支給していた。ソ連政府は公的扶助に関しても、1918 年の「身分法に関する法令集」の中で貧困でどちらかが働くことのできない親子に相互扶助の義務を課していた。生活困窮者のホーム収容に関しても妻や子から援助が得られないであろう独身者が優先されていた。そして現在のロシアにおいても、2012 年には国家社会扶助 (生活保護) を受給するにあたり、個人副業営業 (家庭菜園など) を含む社会適応プログラムの遂行が必要されている (武田 2015)。

以上より、ロシア人にとって貧困とは誰もが陥る可能性のあるものであり、金銭的弱者は特別な存在ではなかった推測できる。そして、ワーキングプアや一斉貧困など貧困に陥る原因に注目すると怠惰と結びつくものは少なく、どちらかと言えばやむを得ない原因が多かった。つまり、ロシア人は金銭的弱者に対する差別的な認識が薄く、国家によって貧困にさせられた犠牲者として同情的な眼差しを向ける傾向があるとも考えられる。他にも、国家からの社会保障システムは単に不足しているだけではなく、制度自体が国民の相互扶助や副業収入に期待している側面が見受けられた。そして国民も、貧困を軽減するための方法として相互扶助や自己消費を目的とした副業を行っていたと考えられる。このような習慣が、モノ不足の際に物々交換で貧しさを凌ごうとしたロシア人の行動に結びついたのでないだろうか。又、農村部の非経済活動人口が貧困に陥りにくい理由も相互扶助

や副業の影響が大きいと考えられ、従ってそのような習慣は農村部でより根強く残っていると推測される。

話を本稿の問いに戻すと、ロシア人が乞食に施しを行う理由の仮説として、金銭的弱者への共感や同情、差別的な眼差しの低さが考えられる。さらに、社会保障の不足や相互扶助を期待した社会システム・制度が、金銭的弱者を助ける習慣を育て、ロシアに根付いたという可能性も指摘できる。

### 3. 正教信仰と相互扶助の伝統

2章から、ロシア人が金銭的弱者に共感を持ちやすいこと、国を頼らず周りの人と助け合うことで貧困の防衛をする習慣があることが分かった。さらに、国家による社会保障の不足や仕組みが、金銭的弱者を助ける習慣をつくり出したのではないかという仮説も立った。ところがここで新たな疑問が湧く。この助け合いの習慣は、「①国家の社会保障制度の仕組みや不足が作りだしたものなのか」、それとも「②元々あった助け合いの文化に国家がすがっていたのか」という疑問である。アンケート Q3「何故多くのロシア人は施しをしますか」とをみると、第一に国民性、続いて宗教の教えや伝統などが指摘されている。又、挙げられた国民性のほとんどが慈悲深さや思いやりの強さなどポジティブな性質だった。<sup>30</sup>仮に先程の疑問での①の候補を“消極的な助け合い”、②の候補を“積極的な助け合い”とすると、②についてももう少し検討の余地があるのではないだろうか。

そこで3章では、宗教信仰や農村共同体での生活に着目して、施しや相互扶助の文化・伝統について考察していきたい。

#### 3. 1 ロシア正教会と施しの精神

ロシアと最もゆかりのある宗教は正教会である。正教会とはキリスト教の一派で、ギリシャ正教会・東方正教会とも呼ばれる。キリスト教には教派が存在するが、元々は正教会しかなかった。というのも、正教会はイエスの最初の教えを忠実に守っている唯一の教会と言われており、異なる解釈が生まれていくに連れて分派していったのである。正教会の特徴として、カトリックに代表するような権威を持った法王の存在がなく、総主教会の地位は皆平等で上下関係がないことが挙げられる。各地域に広がるとその国の言語で礼拝が行われ、その地域の宗教として受け継がれていく。つまりロシアにはロシア正教会が存在しており、現在は信徒数 9000 万人を誇る世界最大の正教会となっている。(堀内 2016)

ロシアに最初にキリスト教を伝えたのはイエスの最初の弟子である聖アンドレイと言われるが、国としてキリスト教を受容したのは約千年後の 988 年、キエフ大公国のウラジミール大公によってである。それまでロシアでは太陽や雷を主とする偶像を崇拝していたが、ウラジミールが新たな信仰を求めていたため様々な宣教師が彼の元へやってきた。彼はキリスト教・イスラム教・ユダヤ教のうちどれを国教とするか悩んだそうだが、結局、

---

<sup>30</sup> アンケート資料 3-1, 3-2 (p.iv)

葡萄酒を禁じているイスラム教、故郷を持たない人の宗教であるユダヤ教の受容をためらい、キリスト教を採用したと言われている。イスウォルスキー（1964）によると、大公はキリスト教受容後、民衆に「麗しき太陽」と呼ばれる程慈愛に満ちた統治者となったそうだ。

ロシアで慈善による福祉が始まったのもキリスト教受容後からである。バーニス(1974)によると、まずウラジミールが996年に早速救貧法を發布した。これは、貧民・病人・老人・心身障害者の保護責任を教会に課すというもので、それらの費用を賄うためにヨーロッパに習った10分の1税を国民にも課した。大公の後継者たちも慈善事業に力を入れ、例えばイヴァン雷帝（1533-84）は在位中に多くの救貧院を建て、路上の貧民にも自ら施しを与えた。ボリス・ゴドノフ皇帝（1598-1605）も大飢饉の際には自ら巨額を投じた。そして富裕な人々の多くも皇帝に習い、精力的に慈善活動を行った。町村レベルの救貧活動もしばしば教区ごとに行われるようになり、貧民収容所などが建てられた。

仲村(1998)は、ロシアでは20世紀に入ってからでも慈善による福祉が目立っていたと指摘する。例えばモスクワのボランティア団体「慈善事業評議会」は、出稼ぎ労働者の救貧活動を1年で25000件も処理していた。その頃出版された『小百科事典』は帝政ロシアの福祉事業について「ロシアでは個々の福祉団体や身分団体の行う民間の慈善制度が圧倒的である。一方国家は非常事態の際の極貧層へ食糧支給など、僅かな福祉活動しかしていない」と表現した。ロシア革命前の「社会的慈善規則」にも、慈善団体への公的な支援金はたった25%で、基本的には民間からの施しや募金で賄われていたと記録されている。

正教会の信仰と施しの結びつきには、恐らく善行への執着と富に対する考え方が関連しているであろう。堀内（2016）によると、正教徒に課された課題と目的は神の戒めを守り天国に到達することであるが、この課題には善行の積み重ねが大きく関連している。まず聖書は、富や栄光は余計な負担だと教えている。例えば18世紀の主教であり優れた説教家であったティーホンは、富や名誉を愛する者を肉の人間として批判し、自己への欲を捨て慈愛に満ちた霊的人間になることが必要だと説いた。ちなみに彼は、世の中の不幸な人たちを7種に分けて彼らを憐れむべき対象とした人物でもある。7種のタイプとは順に「病人・奴隷と農民・貧者と不具者…」と続く。次に、正教は私欲のためでなく隣人愛としてお金を使う施しの精神を称賛している。中村喜和訳の『ロシア中世物語集』によると、キエフ・ルーシ時代の最も優れた君主であったキエフ大公ウラジミール2世は、「まず第一に、神と自らの魂のために、心に神への恐れをもち、惜しまず施しをなせ。これこそあらゆる善行のはじまりであるから。」（廣岡1993:56）と、書き残した。さらに、宮廷付神父でありイヴァン雷帝の教師でもあったシルベストルは長い間ロシア人に家族訓として影響を与えることとなる「ドモストロイ」を記したが、彼もその中で「僧侶や乞食、あわれな人や貧しい人、名もなき人やさすらいの人、そんな人たちを家に呼び入れて、出来る範囲で食物を与え飲みものをあげ、暖かくしてあげることだ。そして、働いて得たものの中から施しをしなさい。それも家とは限らず、仕事場でも路傍でも見つけたらそうしなさい。それで罪が赦されるし、でなければ反対に神に罪が告げられるのです。」（バーニス1974:11）と、施しを推奨した。

正教会は個を尊重する考えを持ちながらも集団としての一致に重きを置く。それは、一人一人がキリストの体の一部だという考えに由来しており、キリストの各部分である全て

の人が隣人として、互いの不足を個性や才能で補い合うことが社会の意義に繋がるとされているからである。御子柴(2003)によると、ギリシャ正教に大きな影響を与えたプラトンも、社会の基礎は相互扶助により各人の不足を補うために出来上がったものだと説いた。プラトンの考えによると、社会的結合の中では全メンバーが自分を相互扶助の責務者だとみなし自分の利益より社会の利益を優先させることが重要で、これが福祉をもたらす最も有益な手段となるという。つまり、貧困者もキリストの体の一部であり、お金を持っている人は隣人愛のためにお金を使う、具体的には貧しい人に施しをしたり教会に寄付をしたりすることが理想とされるのだ(堀内 2016)。

このように、キリスト教の伝来がロシアに慈善による福祉をもたらし、さらにロシア人に施しの精神を教えた。このような精神を持った人々の集団が、次節で述べる共同体での、つまり社会での相互扶助関係を築き上げていったとも言えるのではないか。

### 3. 2 農村共同体における相互扶助の伝統

ロシア人には古くから農村共同体を作りながら生活する習慣があり、その伝統はおおよそソ連が誕生するまで続いた。元は原始的な血縁の共同体だったそうだが、階級社会の発生と共に地縁の共同体に転化したという。共同体とはロシア農民にとって、時には家族や親戚を超える生活上の最も重要な準拠集団であった。(高田 2007)

農村共同体は生活に必要なあらゆる機能を網羅していた。例えば経済・課税・法・相互扶助・行政・教育・宗教的機能などが挙げられる(高田 2007)。共同体では生産力を上げるために各々の経験や能力を考慮して分業も行っていった。鈴木(1990)によると、共同体内には保護活動もあり、これは連帯意識や互助精神に基づくものだという。例えば、「領地管理規定」では、貧農や年少者の税の支払いを富農が一部代行するように指示されていた。他にも共同体は予備の農地を使って救貧活動をしており、予備地の一部は貧農に分与され、残りは共同体員全員で耕し、収穫物を孤児や老人に与えていた。未成年男児が5人以上いる農家にも余分な土地を与えていたという記録もある。兵役に関しても、3人以上働き手がいる農家から排出するなどの調整を行っていた。

地縁の強さは出稼ぎの際にも発揮された。高田(2007)によると、人々はしばしばアルテリと呼ばれる集団を作って出稼ぎに赴いていたという。多くの場合は共同体を基礎とする同郷人アルテリで、職種別に組まれた。アルテリは出稼ぎ先で農的結合体の役割を果たしており、農民たちはまずアルテリに依拠して生活した。アルテリが有していた社会的機能と役割は工場などが提供するそれよりも遥かに豊かだったと考えられている。又、出稼ぎで得られた情報は農村に再び持ち帰られ、次期のアルテリが安心して赴けるように情報交換が行われた。

共同体で行われていた助け合いは規則に則ったものだけでなく、農民の意思によって行われる積極的なものも多かった。その良い例として滞納された税金に対する農民の対応が挙げられる。富農による納税の保護活動については既に述べたが、滞納金については基本的に農村共同体の間で分担して支払うにルールはなかった。共同体自体もそのような租税に関しての相互扶助機能を特に支援していなかった。税を滞納してしまった農民は最悪の場合逮捕され、体刑を課されることもあったという。少額なら出稼ぎに行かされたよう

だ。しかしそんな時、農民たちは相互扶助の精神を大いに発揮したと言われている。貧農を助けるために隣近所の助け合いや、富裕者からの金貸しが行われた。お礼に貧農は労働や現物返済をしたり、ポーマチ（помощь）と呼ばれる集団による共同作業に従事した。金の貸し手はクラーク（富農）と称された人々で、ソ連時代に逮捕の対象だったことからあまり良いイメージを持たれないが、実際には彼らに対して「好意ある人」、「恩人」などというプラスのイメージの呼び名も存在していた。貧しい農家の家主は出稼ぎに出ていることも多かったため、お金が必要な時にすぐに用意するのは難しかった。そんな時にお金を貸してくれる富農の存在は命の恩人的であっただろう。（高田 2007：83-87）

共同作業（労働）を意味するロシア語ポーマチの元々の意味は「手助け」である。農民たちはこの共働労働を「助け合い」と呼んでいたそう。草刈り、脱穀などの緊急の仕事がありながら十分な働き手を持たない農家は、食事と少しのウォッカを用意し、親類や友人を招き仕事を手伝ってもらっていた。働く人に報酬は支払われないが、家主は今できる最大限のおもてなしを約束する。そのため参加者は素晴らしく良く働き、談笑をしたり歌ったりしながら陽気に仕事をしたそう。農民にとってこのようなおもてなしは貨幣支払いよりも遥かに魅力的であった。そもそも農民は貨幣を介する関係を「隣人らしい」関係ではなく「ドイツ的」と批判的な見方をしてきた。1890年代にモスクワの隣県であったスモレンスク県で、橋の修理のために働き手を雇いたい男と領地管理人の間で交わされた会話にそれがよく表れている。その会話で領地管理人は男に、たとえ高い賃金でも働き手を雇うことはできないだろうと伝えている。そして、男にコップ一杯ずつのウォッカを用意することを勧めた。そうすれば、農民は決してウォッカのためではなく純粋に好意から仕事をしてくれるのだという。仮に現金で雇おうとしてしまうと、それは自ら隣人らしい関係を拒否することを意味する。働き手も貨幣を受けとってしまうと、次にその人に仕事を頼むときにお金を払う必要が出てきてしまう。農民たちは恐らく、そのような関係をポーマチとはみなさなかつたのであろう。（スミス・クリスチャン 1984：434-437）

このようにロシアの農村共同体では住民による積極的な助け合いが行われていたことが分かった。そしてこのような助け合いの伝統は貨幣を介す関係を否定したため、現物経済を長引かせ、貨幣経済の浸透を抑制することとなった。

### 3. 3 伝統から精神へ —受け継がれる相互扶助—

#### 3. 3. 1 受け継がれる正教信仰

1節では正教信仰が施しを推奨していることについて述べたが、この信仰は現代ロシアにどれ程影響を与えているのだろうか。

ロシアで正教が受容されて以来、何の問題もなく正教は信仰され続けてきたわけではない。正教信仰を途絶えさせる可能性のあった大きな危機が少なくとも3回は存在した。まずはモンゴル軍が13世紀から約300年間ロシアを支配した時、通称タタールの軛の時である。モンゴル軍の支配は抑圧的であったし、彼らの信仰はイスラム教に傾いていた。しかし幸いにもモンゴル人は他宗教の神からも何らかの利益を期待できると考えていたため、宗教には比較的寛容だった（栗生沢 2016）。このおかげでモンゴルによる支配の間も正教信仰は途絶えずに済んだ。次の危機は18世紀のピョートル大帝の時代である。ティモ

シー(2017)によると、ピョートルはロシア正教会総主教をロシア帝国のもう一人のリーダーとみなすことを決して認めなかった。ロシア正教会はロシアの精神的・道徳的な伝統の擁護者であったのだが、ピョートルは構わず正教会を国家と皇帝の支配下に置くことを決定してしまった。当時のロシア正教会はピョートルが目指す西欧化に反対する保守派の一大拠点であったことも彼をむきにさせた要因であると思われる。ピョートルはそれまで社会福祉の中心だった教会を社会活動から排除しようとしたため教会の活動は制限されたが、なんとか正教会自体は消滅せずに残った。そして最大の危機はやはりソ連時代の宗教弾圧だろう。堀内(2016)によると、1917年のロシア革命で政府は宗教をアヘンとみなし、約70年間大迫害を行った。政府は教会を壊し、同国民のクリスチャンの暗殺を行った。この迫害はゴルバチョフが党書記長に就任し、正教会との話し合いが設けられるまで続いた。ただし、迫害中に全ての教会が破壊されることはなかった。その理由として、政府が正教会への弾圧を途中で弱めたことが挙げられる。第二次世界大戦の際、正教会は信者に祖国防衛訴えるメッセージを発信した。これは祖国防衛に大きく貢献し、スターリンはこの戦争協力を高く評価した。そして革命以来続けていた反宗教政策を撤回し、大幅な譲歩を約束した。ただし、既にロシア正教会の組織的抵抗力は失われていたため、慈善活動を含む社会活動の全面禁止を遵守するという条件を呑まされた。

ゴルバチョフが書記長になるとロシア正教会は驚くほどの勢いで復活し始めた。1998年にロシアキリスト教千年祭が祝われると、1990年には信仰の自由が法律で承認された。教会の再建も進められ、聖堂の数は2013年の統計によると3万以上に及ぶ(堀内2016)。復活の勢いもそのはずで、ティモシー(2017)によると、ロシア革命直前である1914年のロシア正教徒は総人口の70%、対象をロシア人に絞るとほとんど100%を占めていた。迫害中の1940年も宗教人口は45%にも上ったと言われており、隠していた人も含めるとかなりの数の人が相変わらず正教を信仰していたと予測される。ちなみに廣岡(1993)は、宗教申告に関する国勢調査の結果が公開されなかった理由として、政府の想像を遥かに超える数値が出てしまったことが原因でないかと指摘している。又、富田(2003)によると無神論時代にも正教の習慣や教えを守るように努めていた人は多かったようで、つまり、民衆の記憶や伝統は政治やイデオロギーよりも強かったと証明されたと言えるだろう。

見事な復活を遂げ社会的活動も許されたロシア正教会は、再び国民に施しの大切さを訴えている。ロシア正教会は、自身が運営する情報ポータルサイトに施しを推奨する文章を掲載している。それには、「たとえ乞食が酔っぱらってお金を求めてきたとしても、理由を尋ねずに施しをしなさい。」と記してある。他にも、もし乞食がはじめ嘘をついていたとしても同様に施しをするべきだそうで、何故なら後に乞食は必ず感謝をし、施しを与えてくれた人に幸せを運ぶよう祈るからだそうだ。正教会は施しに対する心構えについても、「施しは古きクラスメイトを助けるように行うこと、そして相手が施されたと感じないように振る舞うことが重要である。正教では肉体からではなく魂から施すことを求めており、そのためには驕らないことが何よりも大切なのだ。」と訴えている。<sup>31</sup>こうした訴えは確実に国民に影響を与えており、例えば死後の財産について、施しや寄付に充てるよ

---

<sup>31</sup> «КАК ПОДАТЬ МИЛОСТЫНЮ БЕЗДОМНОМУ», Православие.Ru, 2010, <https://pravoslavie.ru/41885/html> (最終閲覧 2018/12/19)

う遺言に記載するというかつての習慣が再び復活しつつある(富田 2003)。さらにアンケートにて「施しは善行だと思いますか?」と尋ねたところ 58%の人が「はい」と答えた。ちなみに「どちらともいえない」と答えた 19%の人は基本的には施しを善行とみなしていたが、1章で述べたように、マフィアにお金が行くことを警戒しているようだった。<sup>32</sup>

富への執着を否定する正教の教えも受け継がれている。アンケート Q4「お金と幸せは関係あると思いますか?」について、「はい」と答えたのは 51 人中たった 5 人であった。その上「お金持ちは不幸である」と 8 人もの人が指摘した。諺を用いて理由を説明してくれた人も多く、特に「幸福はお金の中にある」という諺が目立った。「100 ルーブルを持つより 100 人の友人を持つ」と「貧乏人はうまいことを思いつくものだ!」という諺の指摘もあった。<sup>33</sup>調べてみると他にも、「富と暮らすのではない、人間と暮らすのだ」、「金は何とかなるものだ」、「貧乏は恥ではない」といった、富に執着する必要がないことを伝える諺がロシアには多数存在している(クラピーヴニク・水上 2016)。既に述べてきたように、正教会は謙虚に生きることの大切さを説いている。つまり、貧しければ必然的に謙虚に生きられるため、彼らはこれを肯定し、誘惑的な富を批判的にみるのである。もちろん富裕層もキリスト教的な道を選ぶことはできるのだが、これには本人の意志が試される。ソ連時代も富を共有の資産とみなし贅沢を批判する平等主義を掲げていたので、富に関するこれらの考えが受け継がれることを邪魔しなかった。むしろ加速させたという意見もある。問題視されているのはどちらかと言えばペレストロイカ以降に誕生した「新ロシア人」と呼ばれるビジネスマンで、利益を求め続ける彼らは常に富の誘惑にさらされているため危険であるとみなされている(堀内 2016)。

このようにロシア正教会は、今でもロシア人の精神の拠り所であり、道徳的規範を示す存在である。正教会による施しの推奨や富に執着することへの批判は、乞食に施しが行われている理由と大きく関係していると言えるだろう。

### 3. 3. 2 受け継がれる共同体精神

2 節では、農村共同体で行われていた積極的な助け合いについて述べたが、この伝統は果たしていつまで続いたのだろうか。そもそも農村共同体の仕組みは決して先進的とは言えなかった。そのため帝政期にも、後進性が指摘された共同体は何度か解体の危機にさらされた。例えば西欧的な資本主義を目指すグループは、農村共同体を農業発展の障害だとみなし廃止すべきだとした。20 世紀に入ると国力増強を目指す政府も共同体を廃止する方向で話を進めていたし、優秀な政治家であったストレイピンの土地改革においても、一揆の拠点となっていた共同体を解体し、私的土地所有の確立を目指していた。しかし、農村共同体は帝政期を通して基本的に解体されることはなかった。最大の理由としては、農民自身が共同体廃止の動きに対し様々な抵抗を行ったことが挙げられる。又、スラブ派も共同体の慣習的な土地保有形態と正教倫理に発した相互扶助は農民の貧困化を阻止しているとして賛美した。社会主義者も共同体の仕組みについて、生産性は私的土地所有と比べると劣るが大衆への富の分配の平等性については遥かに有利であると指摘した。集団主義

---

<sup>32</sup> アンケート項目 (p.ii)

<sup>33</sup> アンケート項目 (p.ii)

や相互扶助といった独自の生活様式を形成していた農村共同体は、福祉供給の主要な経路となっていたのである。(林 2003)

ロシア革命が起きてソ連が誕生すると共同体は解体に向かうのだが、共同体の伝統も同時に姿を消したわけではなかった。1927年の資料によると、当時のロシア共和国の土地のうち91.1%が未だに共同体的だったという。ただし革命によって、共同体から国家の下部機関としての役割は取り除かれたため、伝統だけが残ったというわけである。ソ連期には農業の集団化が行われるが、共同体に特徴的な相互扶助の伝統は集団農場の確立に大いに貢献した。奥田(1984)は集団化後の土地利用について、帝政期の共同体と著しく類似していると指摘している。社会主義体制においては集団性や平等性が大事な価値規範とされたため、共同体的秩序が維持されたと考えられる。又、急激な経済システムの転換に対する自衛として、大衆自身も共同体的生活様式を維持しようとしたとも言われている。その証拠に、工業化が起こると農村から都市へと人口移動がなされたが、この際都市にも共同体的秩序が持ち込まれたことが挙げられる。このようにソ連期に共同体の伝統が失われたとは考えにくく、むしろ集団農場の成立は伝統の維持を後押ししたと言えるだろう。

ソ連期のモノ不足も、人々の積極的助け合いによって乗り越えられた。安達(1994: 70-71)はソ連末期のモノ不足について「物不足が人と人を結びつける」と表現している。物を確保するためには、友人との交際が重要であったという。安達は、「物々交換によって、当時の貧弱な店頭の様子からは想像できないほどロシア人は豊かな生活を送っていた」と当時を振り返る。この物々交換は個人間をとどまらず、企業間でも同様に行われていたようだ。他にも、ソ連時代にはダーチャと呼ばれる農村の別荘が無料で手に入れられた。そのため都市に住むロシア人も例えば週末ごとにダーチャを訪れては、皆で協力して家庭菜園、釣り、キノコ狩りやベリー狩りなどに勤しみ自給自足的な生活を行うのである。この暮らし方もやはり帝政時代の共同体を彷彿させるものであり、人々は体制転換後も以前の習慣や伝統を活かしながら自ら暮らしを良くするよう努めていた。

ソ連崩壊後も生活様式の連鎖性はみられる。例えば、ロシア企業による現金を介さないバーター取引(物々交換)は市場経済移行後も相変わらず特徴的だ。他にも、(Lokshin & Ravalion 2000)によると、1996年と1998年の家計所得に占める賃金の割合は4割程度なのに対し、自家生産からの収入が15~20%、親戚や知人からの援助が1割弱と相対的に高い比率を示したという(林 2003)。現代ロシアにおいても、ロシア人は援助や食料自給などの伝統的な方法によって生活水準の低下を自衛していた。

現代ロシアにおける助け合いの例もみていきたい。百瀬(2002)が行った年金受給者に対するアンケートによると、有職で比較的若い年金受給者の場合はまず親子間での助け合いが目立ったという。例えば、ダーチャでの労働を子ども・孫に手伝ってもらうことなどがそれに当たる。逆に、孫を預かって面倒を見ることや、ダーチャで収穫できた野菜や果実、またそれらの加工品を届けることで年金受給者もお返しをする。百瀬は無職の年金受給者に対してもアンケートを行っており、それによると20例のうち9例がダーチャを所有しておらず、そのうち6例は子どもからの仕送りをもらっていた。仕事を持たずダーチャも持たない年金受給者の生活は非常に苦しいため、急遽お金が必要になった場合は孫に援助してもらおうという例もあった。この結果はダーチャのセーフティネット的な役割を示すのと同時に、親族間の繋がりや強さも表していると言えるのではないかと。もちろん親

族からの援助を受けられない年金受給者もいる。百瀬によるアンケートには、夫と離婚をし、同居していた娘も麻薬中毒となりダーチャでの一人暮らしを余儀なくされている女性の例もあった。ただし彼女には地縁があった。彼女は近所の人たちの畑仕事を手伝うことで、お礼として日用品をもらったり、食事に招いてもらうなどしていた。自分の畑で収穫した作物を買ってもらうこともあるという。彼らはどちらが「施しを受けた」という立場にならないように気を遣っているのだそうだ。現代ロシアでは親族間の結びつきが年金受給者の生活を支える役割を果たしている側面が強い。しかしそれを補う役割として隣人など地縁を活かした助け合いも存在していた。執筆者のアンケートからも知人間での助け合いの活発さが読み取れた。Q5「もしも3カ月間お金がないとしたら親戚以外にあなたを助けてくれる人はいると思いますか？」に対して51人中41人が「はい」と答え、反対に「いいえ」と答えたのは5人だけであった。助けてくれる人として多かったのは「友達」の37人で、その他にも「同僚」や「恋人」、「上司」や「近所の人」という意見があった。理由として目立ったのは、「私が頼ることもできるし、もちろん相手も私のことを頼ることができるから」や、「親友は私を放っておかないと思う」というものだった。<sup>34</sup> これを地縁と呼べるかは分からないが、現代ロシアでは首都であるモスクワでさえも、親族以外に助けを求めることに対して抵抗は薄く、人同士の繋がりが強いと言えるだろう。

最後となるが、旅行記やルポタージュからもロシア人による人助けを垣間見ることができる。例えば亀山（2009:49）の著書には、「くたびれ果てて道端に座り込んでいると、ロシアのばあちゃんが怪訝な表情で僕の顔をのぞき込み『どうしたんだ？』と尋ねてきた。

（中略）『ヤー・ハチュ・イスト（腹減った）』と、うなだれながら生きていくうえで最低限の言葉を力なく発した。（中略）おばばは足早に僕の元を去り、二分後に再び舞いもどってきた。」という体験が載せてある。他にも鈴木（2003:57）はモスクワの公共交通機関の様子について「私が電車の中でいつも感心するのは、お年寄りに席を譲ることがモスクワでは常識となっていることである。（中略）シルバーシートを設けて公衆道徳を守らせる必要もなく、その席を譲るという行為に変な道徳心のキザっぽさもなくて、モスクワではそれは当たり前のこととしてあった。」と、表現している。

共同体生活での伝統はソ連期でも受け継がれ、資本主義化した現在においても「助け合い」という形で残っている。親族間に限らず、近所や知人、更には他人にまで発揮されるロシア人の人助けは、既にロシア人の魂に“助け合い精神”として刻み込まれていると言っても過言ではないだろう。

#### 4. ロシア人は何故乞食に金銭的援助をするのか？

本稿の目的は、ロシア人が乞食に施しをする理由を、貧困や宗教、歴史などの切り口から探ることであった。3章までの考察から、施しの動機となり得る要因を大きく分けて3

---

<sup>34</sup> アンケート項目 (p.ii)

つ見出すことができた。最終章に当たるこの章では、1節でこの3つの要因について順に振り返り、2節で総合的な結論を述べたい。

#### 4. 1 施しの動機として考えられる3つの要因

##### ① 乞食に対する同情や共感

ロシア人が乞食に施しをする理由として、第一に、乞食に対して共感や同情を強く抱いている可能性が指摘できる。1章で述べたように、乞食とは<プロ乞食>であっても、そうでなくても金銭的弱者の象徴であると考えられる。そこで2章では、金銭的弱者がロシア人にとってどのような存在なのかを明らかにするために、貧困問題について検討した。

2章の考察から、ロシア人にとって貧困とは非常に身近な問題であるということが分かってきた。帝政ロシアから現在まで貧困は絶えず、そして比較的大規模に存在していた。特に1991年のソ連崩壊直後の貧困は凄まじく、およそ7割もの人が貧困を経験している。又、主な貧困者のカテゴリーとしては、少なくとも150年間を通してずっと、「子どものいる世帯」、「ワーキングプア」、「年金受給者」を挙げることができた。「子育て」、「労働」、「年金受給」は、多くの人々が人生で経験するステージであり、このような理由からもロシア人にとって貧困は身近な存在であり、共感しやすいものだと言えるだろう。

さらに、ロシアの貧困の特徴からは、ロシア人が金銭的弱者に同情的になる要因が見出せる。前述のように貧困はロシアで広範に認められるのだが、それだけではなく、ロシア人にとって「一時的貧困」は職種などにもあまり関係なく誰もが陥り得るリスクだった。経済ステータスの移動が激しいロシアでは、全国民が貧困と隣り合わせであったと言える。さらに、貧困が国家に左右されやすいのもロシア特徴で、度重なる経済システムや国力増強に向けた方向の転換、それに伴う急進的な新制度の導入による「一斉貧困」がその例であろう。又、強い中央集権を持つロシアは、時にテロルを用いてでも、貧困に苦しむ国民の声や、貧困の存在を封じ込めてきた歴史がある。これはソ連期に顕著だが、強い指導者を持つという点では現在も例外とは言い切れない。つまり、ロシアでは貧困に陥る原因を、怠惰や努力不足のように「個人」に求めることは難しく、どちらかと言えば「国家」に求めやすい傾向がある。一斉貧困や恐怖政治は国家からの被害者意識として国民に仲間意識を芽生えさせたとも言えるかもしれない。そういった意味でロシア人は金銭的弱者に同情を抱きやすいと考えられる。そして、これは決して他人事とは言えない同情心のため、上から目線ではない、仲間としての同情だと言えることができるのではないか。

ロシア正教会が金銭的弱者を憐れみの対象として説いていることも関係していると思われる。3章で高位聖職者であったティーホンについて触れたが、彼は7種の不幸な人、つまり7種の憐れむべき存在として、1つ目に病人、2つ目に奴隷、3つ目に貧者を挙げていた。この教えに基づくと、やはり貧者の象徴である乞食は憐れむべき存在であると言えるだろう。又、ロシア人が<奴隷乞食>に対して比較的寛容な理由としても、宗教的に奴隷そのものを憐れみの対象とみなしてきたことが関連しているのではないだろうか。

以上のように、ロシア人にとって乞食は憐れみの対象である一方で、自らも陥る可能性のある存在だった。ロシアにある「物乞いも牢獄も絶対ないなどと誓うな」(クラピーヴニク 2016:196) という諺がそれを良く表している。共感や同情の対象である乞食が国家に

よって抑圧的に扱われてきた歴史や、十分に保護されていない現状が、国民に乞食救済に対する責任感を芽生えさせているのではないだろうか。そしてこの施しには、自らが陥るかもしれないリスクのためになされている保険的要素が含まれている可能性も考えられる。

## ② 金銭的援助に対するハードルの低さ

ロシアで施しが盛んな理由として、第二に、金銭的援助に対するハードルが低い可能性を指摘できる。一般的に、他人に自分のお金を与えるというのはどこか抵抗感が伴う。

「もったいない」とか、「何故私が…」という気持ちが付きまともったとしてもおかしくはない。そこで、前章までの考察を通じて見えてきたロシア人の富に対する価値観についてまとめながら、施しが盛んに行われている要因を探っていきたい。

金銭的援助へのハードルを下げる要因としては、まず、所有財産への執着の低さが考えられる。ロシア正教会は、自分の富に執着する人を肉的な人間として批判的に評価している。そのため正教会の思想に基づく、お金を持っている人は貧しい人々と分け合うことが理想とされる。つまり他者に金銭的援助をすることは、ロシア国内に大きな影響を与え続けている正教会によって称賛されている行為であり、人々は躊躇なく、募金や寄付と同じような気持ちで施しができると言える。又、3章で述べたように、農村共同体においても正教倫理は活かされていた。貧農の納税・滞納税への保護活動も、自らの富への執着が強い場合はうまく回らなかっただろう。それだけでなく、共同体では貨幣を介さない隣人的な付き合いが理想とされていたということ踏まえると、ロシア人がお金そのものに与える価値がそもそも低いと捉えることもできる。「富と暮らすのではない、人間と暮らすのだ」や「100ルーブルを持つより100人の友人を持つ」との諺が、ロシア人の富に関する価値観を物語っている。このように、ロシアでは主に宗教が所有財産に執着することを否定してきた。そして、自分の財産を他者と分け合うことは宗教的に称賛される行為で、人々は施し行為に躊躇なく踏み切ることができるだろう。

富への執着の低さに関連して、ロシアではお金があることを幸福だとみなさない傾向がみられた。さらに、お金持ちは不幸であるという意見すら存在していた。例えば正教会がビジネスに没頭する「新ロシア人」を危険な存在だと評価していることなどがこの考え方に影響を与えていると思われる。又、社会主義イデオロギーの影響も指摘できる。ソ連期には、富農は処罰の対象であったと述べたが、これらの政府の行動は、「お金持ちは悪」という思想を国民に刷り込んだ可能性がある。逆に3章で紹介した「貧乏人はうまいことを思いつくものだ」という諺が代表するように、貧乏人を道徳的だと評価する慣用表現も多く存在する。つまり、ロシア人にとって富裕層になることや富裕層にいることは、他者から羨望の眼差しを向けられる程の名誉ではないと考えられる。

貯金への無頓着さも施しの動機に関連しているかもしれない。2章では、国や銀行に対する不信感によって、ロシア人は貯金を積極的にしないのではないかと述べた。貯金を好まないことや、稼いだお金はすぐに使うなどのお金の使い方に関する国民性は、あくまで執筆者が現地で感じた主観的な意見である。ただし、施しをする理由として「お金・小銭があったから」という意見が存在したのも事実である。稼いだお金を蓄えたいと思う人が

少ないのだとしたら、たまたまお金がある時に、助けを求めてきた相手に施しをするという人がいてもおかしくはないだろう。

視点を変えると、金銭的援助を求めることに対するハードルも低いのではないかという仮説が立つ。貧者が道徳的だという考え方が一般的だとしたら、金銭的弱者が「弱者」でいる必要はなくなる。精神的に弱者でない彼らは、ある程度強気な態度で助けを求めることができるのではないだろうか。さらに、金銭に与える価値がそもそも低いということは、お金を援助してもらう時に伴う申し訳なさや、恥ずかしさも薄れると思われる。つまり、ロシアでは金銭的援助を受ける側の抵抗感も薄い可能性を指摘できるのではないだろうか。

このように、ロシアではまず宗教が富への執着を批判し、他者と金銭を分け合うことを推奨している。そして貨幣を介さない「隣人の関係」を好んできた歴史や、富者を幸せだとみなさない考え方が、金銭に与える価値自体を低くしているとも捉えられる。それにとどまらず、富者を悪や不幸だとみなす思想すら存在していた。又、貯金をする習慣があまりないという執筆者の体感が正しいとすれば、お金があるから施しをするというように、行為自体に気軽さが生まれているとも推測できる。このように、富への執着の低さやお金を分け与えることへの称賛は、金銭的援助を繁栄させる要因になり得ると考える。さらに、お金や貯金への無頓着さが援助への気軽さを生み出しているとも推測できる。そして金銭的援助に対する抵抗のなさは援助を求める側にも当てはまると考えられ、貧者を道徳的だとみなすロシアでは乞食が必要以上にへりくだる必要はなく、堂々と物乞い行為ができると言える。さらに富に与える価値が低いロシアでは、金銭的援助を受けることに対しても負い目に感じにくいと考えられる。つまり、乞食が多い理由としても、ロシア人の富に対する価値観が影響していると言えるのではないだろうか。

### ③ 伝統によって育まれた“助け合い精神”

金銭の授受に限らず、助け合いの習慣が根付いていることも、施しをする人が多い要因になり得るだろう。3章で述べたように、ロシアではキリスト教受容後から慈善としての福祉が盛んになった。各々がお互いの不足を補う責務者として役割を果たしながら社会を作っていくという考えを持つ正教会は、相互扶助を推奨している。又、古くからあった農村共同体での生活も、共同体員同士での、つまり非血縁者同士での分業やポーマチ、保護活動を通じて助け合いながら営まれていた。そして、この伝統の名残はソ連期を経て、現代ロシアでもみられた。ロシアに住むロシア民族の大多数が相変わらず正教徒であるし、正教会は今もなお貧民救済に積極的である。共同体でみられた相互扶助の伝統も、ソ連期のモノ不足の際に十分に発揮されたし、現在は血縁者同士での相互扶助が主流になってはいるものの、特にダーチャがあるような農村や郊外では未だに地縁を活かした相互扶助が行われていた。旅行記などからは他人同士の助け合いの様子も読み解けた。以上より、3章3節ではロシア人にとって相互扶助の伝統はもはや“助け合い精神”として魂に刻まれたと言っても過言ではないだろうと結論付けた。

ロシアで助け合いが伝統的に盛んな理由として、助け合いの「合う」の部分への認識が強いことが関係していると考えられる。要するに、相手が困っていたら助けようという意思を持ち合わせていることで、自身が相手に頼ることへのハードルも下がっているのではない

かという意味である。この考えに辿り着いた手がかりは「隣人の関係」である。3章で紹介したスモレンスク県での会話で、働き手を集めるには賃金ではなく1杯ずつのウォッカの用意が必要だという話があった。一度賃金を受け取ると、今後助けを求める際にお金が必要になるからである。だから農民は、雇う・雇われるといった従属の関係を嫌い、並列の関係である「隣人の関係」を好んだ。つまりロシア人は、「隣人の関係」を目指すことで、助け合いが気兼ねなく行える人間関係を築いていたと言えるのではないだろうか。

この「隣人の関係」はアンケート Q5 でも垣間見られた。8割以上の人が「3か月間お金がなくても親族以外の知人から助けを得られる」と答えられたのも、頼ることに抵抗を感じないような強い人間関係が築けているからだと言えるのではないか。問いに対する理由として「相手も私を頼れるから」という意見が挙げられたことがその証拠になるだろう。

ロシア人の助け合いは、正教の教えの通り、各人が相互扶助の責務者としての自覚を持って行われているように見受けられる。つまり、ロシア人にとって助ける行為は一方通行ではないと考える。助け合いの継続から更に強い人間関係が築かれ、強い結びつきによって助け合いがより恒常化するというループが出来上がっているのではないだろうか。

このようなループが助け合いの習慣をつくり出しロシア人の“助け合い精神”を育てていると考える。面識がなく、見返りも期待できない乞食への施しを「隣人の関係」に当てはめるのは少々強引かもしれない。しかし、乞食への共感や国民同士の仲間意識、さらには全ての人に対する「隣人愛」を説く正教の教えなどこれまでの考察を考慮すると、ロシア人にとっての「隣人の関係」が他人にまで広がっていてもおかしくはない。交通機関での席の譲り合いなど、金銭以外での人助けが他人に対しても発揮されているように、助け合いが文化になっているロシアでは、乞食に対してでさえ“助け合い精神”が発揮されているとも十分に考えられる。

#### 4. 2 “積極的な助け合い”としての施し

これまでの考察を踏まえて、ロシアでの施し行為は“消極的な助け合い”ではなく、“積極的な助け合い”であると結論付けたい。3章の冒頭で、ロシアでの助け合いの習慣は「国家の社会保障制度の仕組みや不足が作りだしたものなのか（消極的な助け合い）」それとも「元々あった助け合いの文化に国家がすがっていたのか（積極的な助け合い）」という疑問を投げかけた。しかし、第一に、ロシアでの助け合いの伝統は、国家からの社会保障ではなく慈善による福祉が主流の時代から存在していた。第二に、宗教が自由化したペレストロイカ以降も正教を自ら選び、教えを重んじている国民が多い。そして第三に、メディアや国家までが施しを推奨していない現在でさえ施しが盛んに行われている現状がある。つまり現代ロシアでは、救貧活動は国家に任せるべきだという意見も、〈詐欺乞食〉が多いから施しはしないという選択も認められているのである。それでも助け合いの伝統が維持されているというのは、自主的な意思に他ならないだろう。

確かにモノ不足や経済危機の際に、社会保障が行き渡らなかったことが契機となって助け合いが活発化したのは事実だと思われる。しかし、国民それぞれが自分や身内だけを優先しなかったのは助け合いの伝統があったからではないだろうか。つまりどちらかと言え

ば、元から存在していた助け合いの伝統が、危機的状況下でも遺憾なく発揮されたとみなすのが自然であると考える。

一方、国家が国民の相互扶助に期待した制度を運営していたことは事実だと考える。ソ連期において、制度上は親族間での保護義務しか生じていなかったが、国民の多数を占めた農民に対する極端な低保障は明らかに伝統的な相互扶助に期待したものであったと言えるだろう。ショック療法や農業集団化など大胆な政策に踏みきれたのも、国民の生活様式の維持を見越した決断だったと言えるかもしれない。

国家による福祉を「無慈悲」と捉える時代はロシアでもとっくに過ぎ去ったと考えられる。ソ連期には、「暗黙の社会契約」によって国民は十分な保障を国家に望んだし、アンケートにて現在の社会保障における救貧機能に満足している人もほとんどいなかった。つまり、現在ロシア国民は、救貧活動に国家が積極的に介入することを必要だとみなしている。それにもかかわらず、多くのロシア人は今でも乞食に対する施しを自主的に行っている。言い換えれば、現在でも他人の代表格である乞食に対してですら“積極的な助け合い”が維持されているのだ。

## おわりに

本稿の問いは「ロシア人は何故乞食に金銭的援助をするのか？」であった。この問いに対して本稿では、①金銭的弱者への共感や同情が強いこと、②金銭的援助に対するハードルが低いこと、③伝統によって“助け合い精神”が育まれてきたことの3つの要因が重なり合うことで、“積極的な助け合い”が維持されているからだ結論付けた。考察を通じて、ロシアの施しからは「助け合い」というキーワードが見えてきた。

まず、ロシアには乞食への施しを強いるものは特に存在しなかった。乞食への保護義務があるわけでもなく、それをすることで社会的に認められることもない。むしろ、政府は救貧活動の責任を国家にあるとしているし、メディアでも施し行為に批判的な立場を示しているものは多い。施しを推奨するロシア正教会でさえ強制してはいないし、そもそも既に国教ではないため信仰の自由は国民に委ねられている。つまりロシアには、施しをしなくても済む言い訳が多数存在した。そのような環境下でも施しが行われているのは、自主的な意思によって、すなわち「困窮者を助きたい」という思いによって行われている“積極的な助け合い”であるだろうと4章にて結論を出した。

この“積極的な助け合い”が行われる要因についてもいくつか見出すことができた。例えば、金銭的弱者への同情や共感が強いことや、不足の補い合いで社会が成り立つという信仰、富の分配が善行だと考えられていることや、相互扶助によって生活が営まれてきた伝統などが挙げられる。そしてこれらの要因の根本には共通して「困った時はお互い様」という考えがあるように感じられた。つまりロシアでの人助けは、決して一方通行ではないと言えるだろう。

前置きが長くなってしまったが、本稿では、施しの今後、そして施しの是非について検討できなかった。これを残された課題の1つと捉え、おわりにの場を借りて現時点での執筆者の考えを述べたい。

まず施しの今後についてだが、ロシアにある施しの文化は徐々に廃れていくと考える。今後施しを選択せずに済む言い訳がメディアや国家から更に増やされていくと予想できるからである。資本主義化が益々進むと貧富の差が更に広がり、そうすると貧困を高水準な教育や高給な仕事に就くことで防止出来る傾向が強くなると考えられる。富裕な人たちが、貧困は自助努力で防ぐべきものだと考えるようになれば、それははれはつまり金銭的弱者への共感や同情が弱まることを意味するだろう。さらに、資本主義下ではもちろんお金を稼ぐことが重要だとみなされる。従って、資本主義化は所有財産への執着を生み出す恐れもある。それでもロシア正教会への信仰が厚い限り、憐れみの気持ちや慈善による福祉、施しの精神はある程度守られると考える。ただ、アンケートからも世代の上昇と施しの積極性に相関がみられたように、施しの文化は徐々に弱くはなるだろう。特に、資本主義化が著しく進んでいるモスクワなどの大都市から順に衰退していくと予想される。一方で格差社会の進行に伴い援助が必要な人が増えることも予測される。つまり、施し文化の衰退に備えるというわけではないが、国家による社会保障制度の整備はより一層必要となってくるであろう。

次に施しの是非についてだが、これは難しい問題である。1章で紹介したメディアの、「乞食のほとんどが詐欺師もしくはマフィアの奴隷で、彼らへの施しは本物のチャリティーの邪魔をすることを意味する」という意見にも一理あると思うからである。本稿ではあえて、乞食が詐欺師かどうかの検討に重きを置かなかった。それは分かり得ないだろうという予測に加えて、施しが繁栄している理由にはそれ程影響がないと判断したためでもある。もちろん論文作成を通じて、全ての乞食が詐欺師だとはとても思えなかった。施しのおかげで暮らせていけている人もいた。ただ、多くの乞食が本当は困窮していないという説を覆すだけの根拠は少なくとも本稿では見つけられなかった。従って本稿では、施しの是非について結論を出すことは避けた。

それでもやはり、ロシアにある助け合いの文化は執筆者の目に魅力的に映った。他国ではなかなかみられない、特異な歴史が生み出した特異な文化ではないだろうか。執筆を通じて、相互扶助というのは実はどんな経済ショックにも強い防衛手段で、助け合いによってお互いの困難の軽減をする行為はある意味で最も合理的な手段であるとさえ思われた。ロシアでの施しの繁栄が今後どうなるかは分からない。ただ、今後もロシアにあるこの魅力的な文化が維持されていくことを願いたい。

## 参考・引用文献

- 安達紀子, 1994, 『モスクワ狂詩曲ーロシアの人びとへのまなざし 1986-1992』新評論  
岡田進, 2006, 「旧ソ連と新生ロシアの社会保障と社会政策ー比較研究の試み」  
『商経論叢』42(3), 87-114.  
亀山哲郎, 2009, 『やってくれるね、ロシア人！ー不思議ワールドとのつきあい方ー』

- 日本放送出版協会  
衣川靖子, 2015, 「ロシアの保険医療事情と政策」  
『海外社会保障研究』 191, 16-30.
- 雲和広, 2015, 「ロシアの社会保障をめぐる社会経済環境の変化」  
『海外社会保障研究』 191, 6-15.
- 栗原成郎, 2007, 『諺で読み解くロシアの人と社会』 東洋書店  
栗生沢猛夫, 2016, 『図説ロシアの歴史』 河出書房新社  
柴田嘉彦, 1989, 『ソ連社会保障の研究』 校倉書房  
下斗米伸夫・島田博編, 2012, 『現代ロシアを知るための60章』 明石書店  
鈴木健夫, 1990, 『帝政ロシアの共同体と農民』 早稲田大学出版部  
鈴木常浩, 2003, 『モスクワ地下鉄の空気—新世紀ロシア展望—』 現代書館  
高田和夫, 2007, 『近代ロシア農民文化史研究』 岩波書店  
武田友加, 2004, 「1990年代ロシアの貧困動態：貧困者間の相違性の把握」  
『スラブ研究』 51, 241-272.  
\_\_\_\_\_, 2006, 「移行経済下ロシアの貧困緩和と貧困化の決定要因：都市と農村」『経済学論集』 72(1), 30-50.  
\_\_\_\_\_, 2011, 『現代ロシアの貧困研究』 東京大学出版会  
\_\_\_\_\_, 2015, 「ロシアの生活保護政策：貧困の現状と対策」  
『海外社会保障研究』 191, 31-41.
- 仲村優一・一番ヶ瀬康子編, 1998, 『世界の社会福祉2 ロシア・ポーランド』  
旬報社  
仲村優一・阿部志郎・一番ヶ瀬康子編, 2005, 『世界の社会福祉年鑑 2004』  
旬報社
- 林裕明, 2003, 「歴史的視点から見たロシアの生活様式」『総合政策論集』 6, 93-103.  
廣岡正久, 1993, 『ロシア正教の千年—聖と俗のはざままで—』 日本放送出版協会  
堀内理恵, 2016, 『ロシアの風景』 文芸社  
マルガリータ富田, 2003, 『ロシア人・生まれてから死ぬまで—その習慣・儀礼・信仰』  
東洋書店  
御子柴道夫, 2003, 『ロシア宗教思想史』 成文社  
村知稔三, 2015, 「ロシアにおける子育て支援政策の現状と課題」  
『海外社会保障研究』 191, 42-51.
- 百瀬響, 2002, 『ロシア極東に生きる高齢者たち—年金生活者のネットワーク』 東洋書店  
米原万理, 2004, 『旅行者の朝食』 文春文庫
- リュドミーラ クラピーヴニク・水上則子, 2016, 『ことわざと成句が語るロシア文化』  
勉誠出版
- Bernice Q. Madison, 1968, "SOCIAL WELFARE IN THE SOVIET UNION",  
California: STANFORD UNIVERSITY PRESS.  
(=1974, 光信隆夫ほか訳 『ソ連の社会福祉』 光生館)

Helene Iswolsky, 1962, “Christ in Russia”, London.

(= 1964, 平塚武訳『ロシア人とキリスト教』聖パウロ修道会)

R. E. F. Smith・David Christian, 1984, “Bread and Salt: A Social and Economic History of Food and Drink in Russia”, Cambridge University Press.

(=1999 鈴木健夫ほか訳『パンと塩-ロシアの食生活の社会経済史』平凡社)

Timothy Ware, 1963, “The Orthodox Church –An Introduction to Eastern Christianity; New Edition”, London. (=2017, 松山雄一監訳『正教会入門－東方キリスト教の歴史・信仰・礼拝』新教出版社)

В.П.Данилов (=1977 荒田洋ほか訳『ロシアにおける共同体と集団化』御茶の水書房)

## 図表

表 1

<p><b>&lt;困窮した乞食&gt;</b></p>	<p>年金の枯渇、失業、手術費用がないなど一時的に助けが必要な時に物乞いをする集団。</p>	
<p><b>&lt;プロ乞食&gt;</b></p>	<p>&lt;詐欺乞食&gt;</p>	<p>儲けるためにビジネスとして物乞いをする集団。人々から施しをもらうためにあらゆる手段で同情を誘う。</p>
	<p>&lt;詐欺乞食&gt;以外</p>	<p>生活費を稼ぐため、もしくはその足しにするために専業的・副業的に物乞いをする集団。音楽の演奏などを行う場合もあれば、哀れみを誘う努力をしている場合もある。</p>
<p><b>&lt;奴隷乞食&gt;</b></p>	<p>マフィアからパスポートを取られたなどを理由にマフィアの奴隷になり、強制的に物乞いをさせられている集団。 近年新たに登場した概念。</p>	

## 巻末資料

### アンケート調査の詳細

#### アンケート対象者

モスクワ在住経験のある 18～69 歳のロシア人 51 名

なるべく世代による偏りが出ないように収集した。

(10代 5名・20代 10名、30代 11名、40代 10名、50代 10名、60代 5名)

#### 調査方法

メールまたはSNSを通じてアンケート項目を送り、記述形式で回答してもらった。

#### 集計方法

記述式アンケートのため、得られた回答をいくつかのカテゴリーに分けて回答人数をパーセンテージもしくはそのまま人数で表記した。複数のカテゴリーにまたがる回答の場合はどちらもカウントした。

#### アンケート項目

Q1. モスクワには何故乞食や、物乞いをするホームレス<sup>35</sup>が多いと思いますか？

Q2. 乞食に施しをしますか？それは何故ですか？

はい→どの位の頻度で行いますか？

施しの有無は乞食のタイプによりますか？

Q3. 何故多くのロシア人は施しをすると思いますか？施しは善い行いですか？

Q4. お金と幸せは関係あると思いますか？

Q5. もしも3カ月間お金がないとしたら親戚以外にあなたを助けてくれる人はいら  
ると思いますか？

はい→それは誰だと思いますか？

Q6. 最貧困層に対しての社会保障は十分だと思いますか？

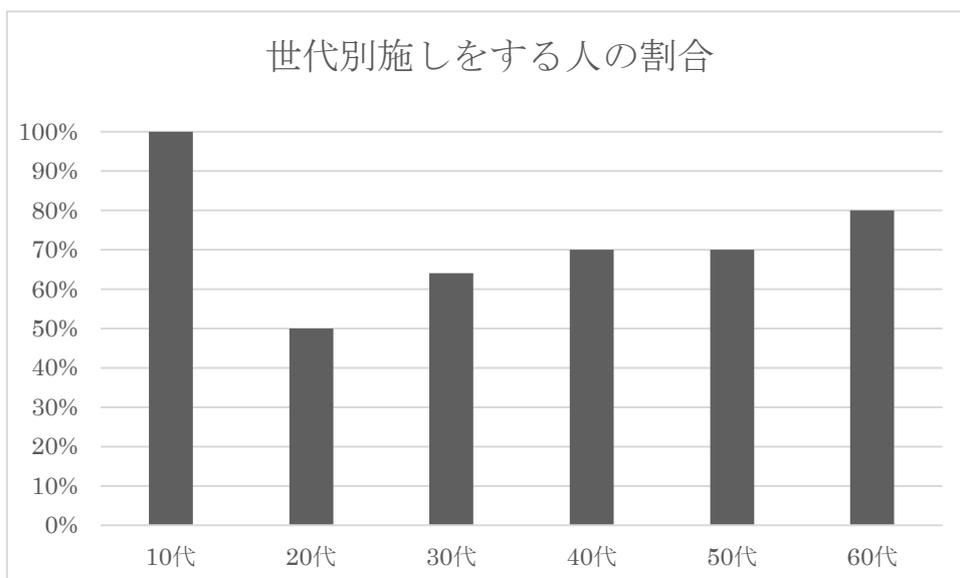
いいえ→何が足りていないと思いますか？

---

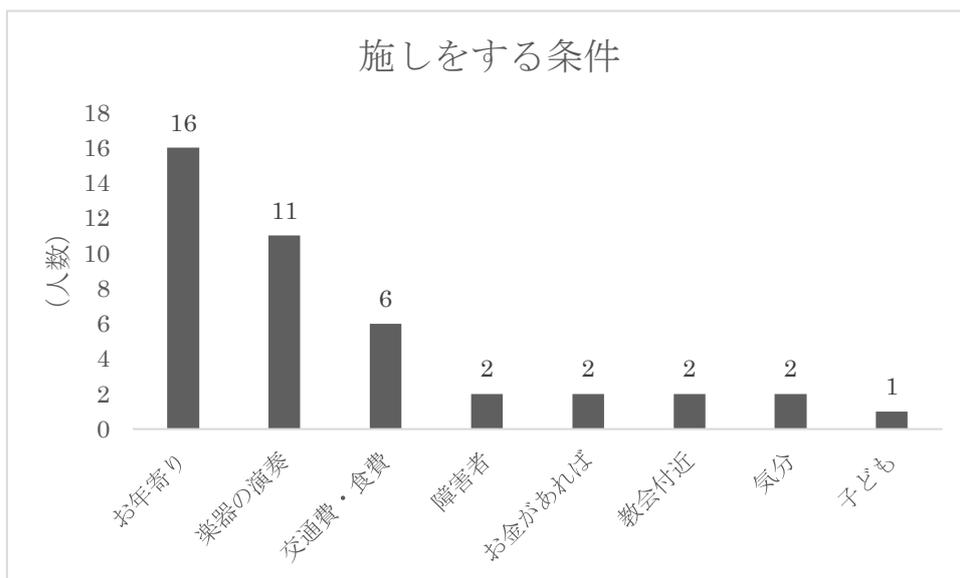
<sup>35</sup> 物乞いをせずに暮らすホームレスの存在や、住まいを持っている乞食の存在を考慮して「物乞いをするホームレス」とした。

## アンケート資料

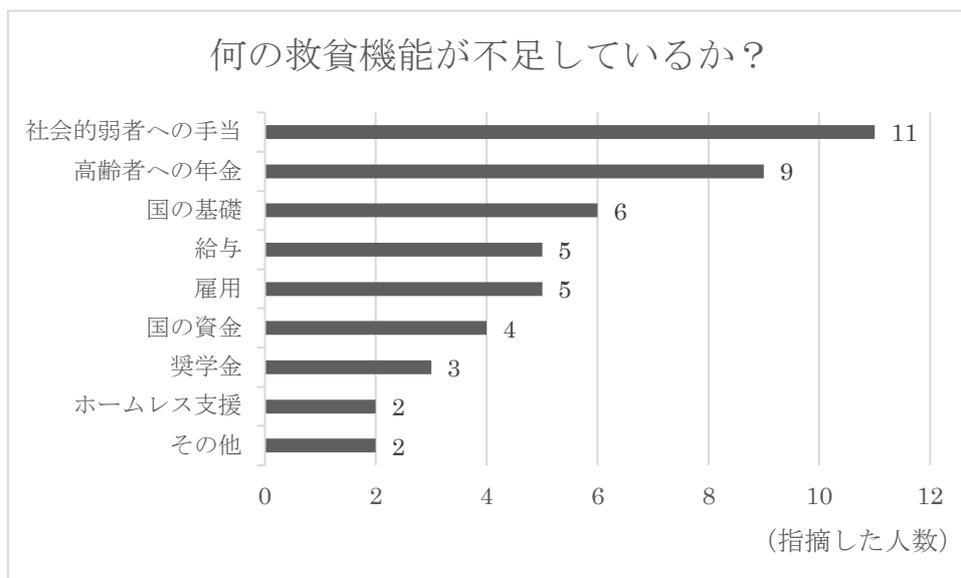
### アンケート資料 1-1



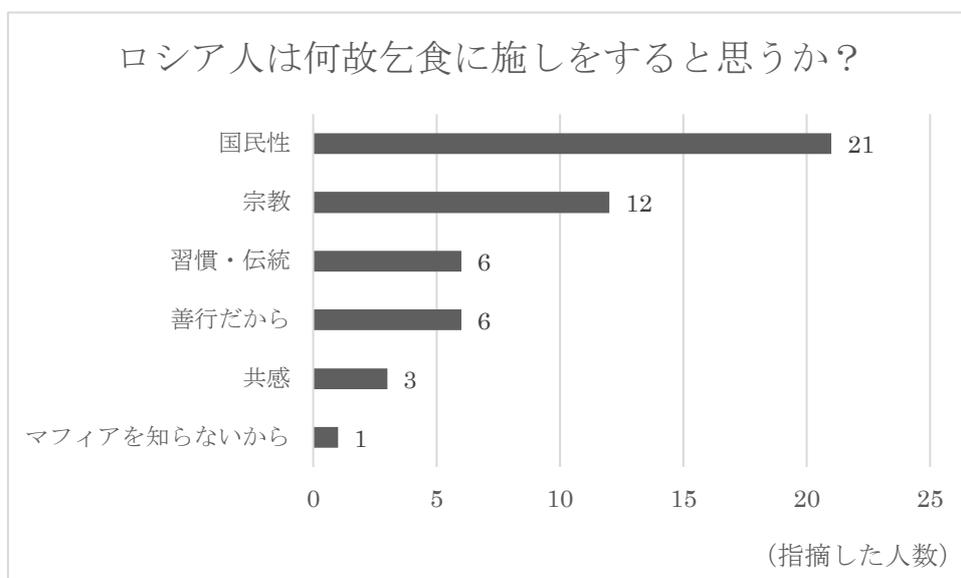
### アンケート資料 1-2



### アンケート資料 2-1



### アンケート資料 3-1



アンケート資料 3-2

